訓註

大学菜根譚

臨風笹川種郎校

東京 誠文館出版部藏

43. 3. 30
内務

特71
695

訓註ポケット菜根譚題詞

逐客孤踪。屏居蓬舍。樂與方以內人遊。不樂與方以外人遊也。妄與千古聖賢。置辯於五經同異之間。不妄與二三小子。浪跡于雲山變幻之麓也。日與漁父田夫。朗吟唱和於五湖之濱。綠野之坳。不日與競刀錐榮外斗者。交臂抒情於冷熱之場腥羶之窟也。間有習濂洛之說者。牧之。習竺乾之業者闢之。爲譚天雕龍之辯者遠之。此足以畢予山中伎倆矣。適有友

人洪自誠者。持菜根譚示予。且丐予序。予始訑訑然際之耳。既而徹几上陳編。屏胸中襍慮。手讀之則覺。其譚性命直入玄微。道人情曲盡岩險。俯仰天地。見胸次之夷猶。塵芥功名。知識趣之高遠。筆底陶鑄。無非綠樹青山。口吻化工。盡是鳶飛魚躍。此其自得何如。固未能深信。而據所擒詞。悉砭世醒人之喫緊。非入耳出口之浮華也。譚以菜根名。固自清苦歷練中來。亦自栽培灌溉裡得。其顚頓風波。備嘗險阻。可想矣。洪子曰。天勞我以形。吾逸吾心以補之。天厄我以

遇。吾高吾道以通之。其所自警自力者。又可思矣。由是以數語辯之。俾公諸人人。知菜根中有眞味也。

三峰主人　于孔兼　題

訓註ポケット菜根譚序

菜根譚は明代清言の一にして洪自誠の隨筆なり、思ふに此種の觀察と批評とは己を完うする所以の途なり、往々首肯し難き淺薄なる皮肉なきにあらずと雖、其は明代の洪自誠と現代に生きる吾人との間に必然起るべき相異なり。現代の社會に於いて常に斯かる觀察をなすことを得ば處世の秘訣を理解したるものと言ふべし。

編者の淺學菲才、此書を公にすることを得しは、偏に笹川先生の懇篤なる助力による、若し先生の助力なかりせば、恐らくは此一小冊も到底完了することを得ざりしならん、出版に際し深く

先生を煩はしたることを謝す。

編者識

訓註 ポケット菜根譚 前篇

還初道人洪自誠著
五橋勝屋英造訓註
臨風笹川種郎校閲

時。依阿權勢者。凄涼

萬古。達人。觀物外之物。思身後之身。寧受

一時之寂寞。毋取萬古之凄涼。

訓方 道徳を棲守する者は一時に寂寞たり。權勢に依阿する者は萬古に凄涼たり。達人は物外の物を觀、身後の

△物外之物は金銀財寶以外のもの即ち道徳を云ふ、
△身後之身は其人の名聲徳行の如きもの にて死後永く世に傳はるものを云ふ、

身を思ふ。寧一時の寂寞を受くるも、萬古の凄涼を取る毋かれ。

涉世淺點染亦淺。歷事深機械亦深。故君子與其練達不若朴魯。與其曲謹不若疎狂。

△機械は巧詐の意なり、
△點染、世間の惡習に染むこと、
△曲謹、禮節の如きものに餘り拘泥過ぎること、
△疎狂、は淡泊豪放をいふ、

讀方　世を涉るよ淺ければ點染も亦淺く、事を歷ること深ければ機械も亦深し。故に君子は其練達ならんよりは朴魯なるに若かず。其曲謹ならんよりは疎狂なるに若かず。

君子之心事。天青日白。不可使人不知。君子之才華。玉韞珠藏。不可使人易知。

◎他人をして自己の心事を疑はしむるが如きは宜しからず、されど自己の才華は成るべく人をして知らしめざる樣にせざるべからず、
△智械機巧とは權謀術數をいふ、

讀方　君子の心事は天青く日白く、人をして知らざらしむべからず。君子の才華は、玉韞まれ珠藏れ、人をして知り易からしむべからず。

勢利紛華。不近者爲潔。近之而不染者爲尤潔。智械機巧。不知者爲高。知之而不用者爲尤高。

讀方　勢利紛華は近かざる者を潔しと爲す。之に近いて染まざる者を尤も潔しと爲す。智械機巧は知らざる者を高しと爲す。之を知りて用ひざる者を尤も高しと爲す。

△砥石は刃物の鏃を擦り磨く石なり。此處には他人の忠言苦言をいふ、
△鴆毒は毒藥なり。
◎「良藥は口に苦く忠言は耳に逆ふ」の古語と同義なり、

△喜神は嬉々として愉快なる精神を云ふ、

す。

耳中常聞逆耳之言。心中常有拂心之事。
纔是進德修行的砥石。若言言悅耳。事事快心。便把此生埋在鴆毒中矣。

讀方　耳中常に耳に逆ふの言を聞き。心中常に心に拂るの事あらば、纔に是れ進德修行的の砥石なり。若し言々耳を悅ばし事々心を快くせば、便ち此の生を把つて鴆毒の中に埋在す。

疾風怒雨。禽鳥戚戚。霽日光風。草木欣欣。
可見天地不可一日無和氣。人心不可一日無喜神。

△醲は濃い酒、肥は肥えたる肉をいふ、
△辛は蕃椒の類。甘は砂糖の類をいふ、
◎最初の二句は靜中自ら動あるを示す、

讀方　疾風怒雨には禽鳥も戚々たり。霽日光風には、草木も欣々たり。見るべし天地一日も和氣無かるべからず。人心一日も喜神無かるべからず。

醲肥辛甘非眞味。眞味只是淡。神奇卓異非至人。至人只是常。

讀方　醲肥辛甘は眞味に非ず。眞味は只是れ淡なり。神奇卓異は至人に非ず。至人は只是常なり。

天地寂然不動。而氣機無息少停。日月晝夜奔馳。而貞明萬古不易。故君子間時要

△氣機。氣は天地の氣、機は樞機若くは機用（ハタラキ）と云ふ意なり、
△貞明、常明なり、
△喫緊的心思とは引締つた精神をいふ、

◎此一章、觀心養養の要領、心靈上の工夫を示す、

有喫緊的心思。忙處要有悠閒的趣味。

讀方 天地は寂然動かずして氣機は息ひことなく停ること少し。日月は晝夜奔馳して貞明は萬古易らず。故に君子は閒時に喫緊的心思有るを要し。忙處に悠閒的趣味有るを要す。

夜深人靜。獨坐觀心。始覺妄窮而眞獨露。
毎於此中得大歸趣。既覺眞現而妄難逃。
又於此中得大慚愧。

讀方 夜深く人靜にして獨り坐して心を觀し、始めて妄窮まつて眞獨り露はるゝを覺ゆ。毎に此中に於いて大機趣を得。既に眞現して而して妄の逃れ難きを覺ゆ。又此の中に於いて大慚愧を得。

△恩裡とは人から恩寵を受くる時をいふ、
△快意時、恩寵の裏へざる時、
△拂心處、失敗して不愉快なる時、

恩裡由來生害。故快意時。須早回首。敗後或反成功。故拂心處。莫便放手。

讀方 恩裡由來害を生ず。故に快意の時に須く早く首を回らすべし。敗後或は反つて功を成す。故に拂心の處。便ち手を放つこと莫れ。

△藜口（アカザ）を口にし莧（ヒエ）を腸にする者にて粗食をする貧賤のものを云ふ、

藜口莧腸者。多氷清玉潔。袞衣玉食者。甘婢膝奴顏。蓋志以澹泊明。而節從肥甘喪也。

△衮衣、君王の衣服、
△玉食、美食、
△婢膝奴顔、他人の鼻息を覘ひ名利を求むるに汲々たるもの、
△肥甘、美食を云ふ、
△面前的田地、此世に生存してゐる間の心地、
△身後的恵澤、生前になせし事蹟にして死後に傳はるが如き恩恵德澤を云ふ、
△不朽永久の意なり、
◎利益を獨占するなかれ、情欲を恣にすること勿れ、

讀方　藜口莧腸の者には、氷清玉潔多し。衮衣玉食の者は婢膝奴顔を甘んず。蓋し志は澹泊を以て明に、而して節は肥甘に從りて喪はる。

面前的田地要放得寛。使人無不平之歎。
身後的恵澤要流得長。使人有不匱之思。

讀方　面前的の田地は放ち得て寛きを要す。人をして不平の歎なからしむ。身後的の恵澤は流し得て長きを要す。人をして不匱の思ひあらしむ。

徑路窄處。留一步與人行。滋味濃的。減三分讓人嗜。此是涉世一極安樂法。

◎人物となり學者となるには必ずしも高遠の事業、破天荒の工夫をなすことを要せず、
◎交友、修養の道を說く、

讀方　徑路窄き處は一歩を留めて人の行くに與へ、滋味濃なる的は三分を減じて人の嗜むに讓る。此は是れ世を渉る一の極安樂法なり。

作人無甚高遠事業。擺脫得俗情。便入名流。爲學無甚增益工夫。減除得物累。便超聖境。

讀方　人と作るに甚だ高遠の事業なし、俗情を擺脫し得れば、便ち名流に入る。學を爲すには甚だ增益の工夫なし、物累を減除し得れば、即ち聖境を超ゆ。

交友須帶三分俠氣。作人要存一點素心。

△俠氣は義俠心なり、
△素心は心以外の事物の爲に動かされ又は汚されざる心、
△寵利、自己の利益となること、
△德業、世間の利益になる德行事業、
△修爲。學問修行を貫ふ、
△減分中は飽迄其分を盡すこと、
◎自ら立たんと欲せば須く先づ人を立て、自ら達せんとせば先づ人を達せしめざるべからず。處世利達の秘訣は此一言に盡く、
△當不得とは敵はぬと言ふ意なり、
◎世人蓋ふ功勞あるも一の矜心を容れは功勞の價値皆無なり、天に翔るの罪過も一の悔心を得れば罪惡自然に消滅す、
△完名美節、完全なる名譽、美しき功蹟、
△不宜獨任、自己一人のものとすべからず、
△不宜全推、自己を

讀方　友に交るには須く三分の俠氣を帶ぶべし。人と作るには一點の素心を存するを要す。

寵利毋居人前。德業毋落人後。受享毋踰分外。修爲毋減分中。

讀方　寵利は人前に居ること毋れ、德業は人後に落つること毋れ、受享は分外に踰ゆること毋れ、修爲は分中を減することなかれ。

處世讓一步爲高。退步即進步的張本也。待人寬一分是福。利人實利己的根基。

讀方　世に處するには一步を讓るを高しと爲す。步を退くるは即ち步を進むる的の張本なり。人を待つには一分を寬くする是れ福なり。人を利するは實は己を利する的の根基なり。

蓋世功勞。當不得一個矜字。彌天罪過。當不得一個悔字。

讀方　世を蓋ふの功勞も一個矜の字に當り得ず。天に彌るの罪過も一個の悔の字に當り得ず。

完名美節。不宜獨任。分些與人。可以遠害全身。辱行汚名。不宜全推。引些歸己。可以韜光養德。

潔白にし罪の全分を他人に推し附くるは非なり、

△韜光、自己の光明德行を韜み藏す、

◎事をなす必ず餘裕なかるべからず滿は却つて損を召くものと知るべし、

△個有餘不盡的意志とは爲し得る勢力あつて、全部を用ひ盡さず、餘裕を存して置くと云ふ意なり、

譚曰 完名美節は宜しく獨り任ずべからず。些を分ちて人に與へ、以て害を遠げ身を全うすべし。辱行汚名は宜しく全く推すべからず、些を引いて己れに歸し、以て光を韜み德を養ふべし。

事事留個有餘不盡的意思。便造物不能忌我、鬼神不能損我。若業必求滿。功必求盈者。不生內變必召外憂。

譚曰 事々個の有餘不盡的の意志を留れば、便ち造物も我を忌むと能はず。鬼神も我を損すると能はず。若し業は必ず滿を求め、功は必ず盈を求むる者は內變を生せざれば必ず外憂を召く。

家庭有個眞佛。日用有種眞道。人能誠心和氣。愉色婉言。使父母兄弟間形骸兩釋意氣交流。勝於調息觀心萬倍矣。

譚曰 家庭に個の眞佛あり。日用に種の眞道あり。人能く誠心和氣。愉色婉言。父母兄弟の間をして形骸兩ながら釋け、意氣交流れしめば、調息觀心に勝ること萬倍ならん。

好動者雲電風燈。嗜寂者死灰槁木。須定雲止水中有鳶飛魚躍氣象。纔是有道的

◎觀心修養は必ずしも坐禪靜坐を要せず。日常生活の中になし得るものと知るべし、

△調息は老子學派の修養法、陽明の靜坐、禪の坐禪に等し、

△定雲とは風動かざるを言ふ、

△止水は水の停滯して動かざるをいふ、

△有道的心體とは眞に道を行ふ人の心態なり、

◎人を敎へ人の惡を責むるには嚴正高遠に過ぎざること必要なり、

心體。

讀方　動を好む者は雲電風燈、寂を好む者は死灰槁木。須らく定雲止水の中に鳶飛び魚躍るの氣象有るべし。總に是れ有道的の心體なり。

攻人之惡毋太嚴。要思其堪受。敎人以善毋過高。當使其可從。

讀方　人の惡を攻むるは太だ嚴なること毋れ。其の受くるに堪ふるを思ふことを要す。人を敎ふるに善を以てするは、高きに過ぐること毋れ。當に其をして從ふべからしむべし。

◎汚潔、明晦一にして二ならず、

△矜高は自ら高くする云ふ、

△倨傲は傲慢なること、

△悋嗇とは愛憎好惡の念をいふ、

糞虫至穢。變爲蟬。而飲露於秋風。腐草無光。化爲螢。而耀采於夏月。固知潔常自汚出。明每從晦生也

讀方　糞虫は至穢なり、變じて蟬と爲つて露を秋風に飲む。腐草は光無く化して螢と爲つて采を夏月に輝かす。固に知る、潔は常に汚より出で、明は每に晦より生ずることを。

矜高倨傲。無非客氣。降伏得客氣下。而後正氣伸。情欲意識。盡屬妄心。消殺得妄心盡。而後眞心現。

△意識は是非得失を分別する智識なり、

讀方　矜高倨傲は、客氣に非るなし。客氣を降伏し得下して後正氣伸ぶ。情慾意識は盡く妄心に屬す。妄心を消殺し得盡くして後眞心現はる。

飽後思味則濃淡之境都消。色後思嬌。則男女之見盡絕。故人常以事後之悔悟。破臨事之癡迷。則性定而動無不正。

讀方　飽後味を思へば則ち濃淡の境都へて消え。色後嬌を思へば、則ち男女の見盡く絕ゆ。故に人常に事後の悔悟を以て、臨事の癡迷を破らば、則ち性定りて動くとして正しからざるは無し。

△軒冕　軒は大夫の乘る車、冕は大夫以上の人の冠、高位顯官をいふ、

△林泉之下　朝廷に仕へず、道を樂しむ隱士の居る處、

△廊廟的經綸　天下國家を治むる雄大なる計畫をいふ、

◎過なきは即ち功、怨なきは即ち德なり、

居軒冕之中。不可無山林的氣味。處林泉之下。須要懷廊廟的經綸。

讀方　軒冕の中に居ては、山林的の氣味なかるべからず。林泉の下に處しては、須く廊廟的の經綸を懷くことを要すべし。

處世不必邀功。無過便是功。與人不求感德。無怨便是德。

讀方　世に處しては必ずしも功を邀めざれ、過無き便ち是れ功なり。人に與へては德に感ずることを求めざれ、怨なき便ち是れ德なり。

憂勤是美德。太苦則無以適性怡情。澹泊是高風。太枯則無以濟人利物。

讀方 憂勤は是れ美德なり、太た苦めば則ち以て性に適ひ情を怡ばしむる無し。澹泊は是れ高風なり、太た枯れば則ち以て人を濟ひ物を利する無し。

事窮勢蹙之人。當原其初心。功成行滿之士。要觀其末路。

讀方 事窮まり勢蹙まるの人は、當に其初心を原ぬべし。功成り行滿つるの士は、其の末路を觀るを要す。

富貴之家宜寬厚。而反忌刻。是富貴而貧賤其行矣。如何能享。聰明人宜欽藏。而反炫耀。是聰明而愚懵其病矣。如何不敗。

讀方 富貴の家は宜しく寬厚なるべく而して反つて忌刻なり。是れ富貴にして其行を貧賤にす。如何ぞ能く享けん。聰明の人は宜しく斂藏すべくして反つて炫耀す。是れ聰明にして其病を愚懵にす。如何ぞ敗れざらん。

居卑而後知登高之爲危。處晦而後知向明之太露。守靜而後知好動之過勞。養默而後知多言之爲躁。

◎憂勤、澹泊共に高風美德なり、されど過ぎたるは尙ほ及ばず、
△憂勤、心慮勤勉なること、
△澹泊、淡泊にして拘泥せざるを云ふ、
◎窮しては自ら顧み、達しては益々之を完うすることを忘るべからず、

△忌刻、猜忌刻薄なり、
△斂藏、才智を現はさざること、
△炫耀、人の眼前に己の才智を現す、
◎局に當るもの自ら省みず、自己の行爲行動を冷靜に傍觀すること能はざるは危し、

◎富貴功名に囚はるるものは凡人なり、道德仁義に囚はるるものまた未だ聖賢の域に達せず、

△窺見、思慮分別のある人の持つて居る一種の見解と言ふが如きものなり、

讀方 卑に居りて後に高に登るので危きたることを知る。晦に處して後に明に向ふの太だ露るゝことを知る。靜を守りて後に動を好むの勞に過ぐるを知り、默を養ひて後に多言の躁たるを知る。

放得功名富貴之心下。便可脫凡。放得道德仁義之心下。纔可入聖。

讀方 功名富貴の心を放ち得下して便ち凡を脫すべし。道德仁義の心を放ち得下して纔に聖に入るべし。

利慾未盡害心。意見乃害心之蟊賊。聲色未必障道。聰明乃障道之藩屏。

△聲色、歌妓賣女をいふ、

◎常に人に讓り、自ら一歩を退くの工夫をなさば己を完うするを得べし、

◎小人の惡を惡まじ、君子に禮を完うすること難し、

讀方 利慾未だ盡く心を害せず。意見乃ち心を害する蟊賊なり。聲色未だ必ずしも道を障へず。聰明乃ち道を障ふる藩屏なり。

人情反覆。世路崎嶇。行不去處。須知退一步之法。行得去處。務加讓三分之功。

讀方 人情反覆し、世路崎嶇たり。行き去らざる處、須く一歩を退くるの法を知るべし。行き得去る處、務めて三分を讓るの功を加へよ。

待小人不難於嚴。而難於恭。待君子不難於恭。而難於有禮。

◎聰明紛華は人の欲する所なれど一時的のものなり、渾噩澹泊は人の好まざる所なれど永久的なり、

△渾噩、質朴にして沈默を守ること、

△紛華、濃厚華美なること、

△澹泊、は淡泊なり

◎外敵外冦を降伏する秘訣は自己の心情を抑制するにあり、

讀方　小人を待つは嚴に難からずして惡まざるに難し。君子を待つは恭に難からずして禮あるに難し。

寧守渾噩而黜聰明。留些正氣還天地。寧謝紛華而甘澹泊。遺個清名在乾坤。

讀方　寧ろ渾噩を守りて聰明を黜け、些の正氣を留めて天地に還せ。寧ろ紛華を謝して澹泊に甘んじ、個の清名を遺して乾坤に在れ。

降魔者。先降自心。心伏則群魔退聽。馭橫者。先馭此氣。氣平則外橫不侵。

讀方　魔を降す者は先づ自心を降せ。心伏すれば則ち群魔退き聽く。橫を馭する者は、先づ此氣を馭せよ。氣平かなれば則ち外橫侵さず。

△閨女、とは閨中に養はるゝ女子を云ふ、

◎欲には快にして理には勇なるべし、

△欲路上事、欲情上

教弟子如養閨女。最要嚴出入謹交友。若一接近匪人。是清淨田中下一不淨種子。便終身難植嘉禾矣。

讀方　弟子を教ゆるは閨女を養ふが如し。最も出入を嚴にし交遊を謹しむを要す。若し一たび匪人に接近せば、是れ清淨田中に一不淨の種子を下すなり。便ち終身嘉禾を植ゑ難し。

欲路上事。毋樂其便而姑爲染指。一染指

のこと、
△理路上事、道理上のこと、

◎心念の濃淡は宜しく其中庸を得ざるべからず、

便入萬仞。理路上事。毋憚其難而稍爲退一步。一退一步。便遠隔千山。

讀方 欲路上の事は其の便を樂みて、姑く指を染むるを爲す事勿れ。一たび指を染むれば便ち深く萬仞に入らん。理路上の事は、其の難きを憚りて稍々歩を退くるを爲す事毋れ。一たび歩を退くれば、便ち遠く千山を隔てん。

念頭濃者自待厚。待人亦厚。處處皆濃。念頭淡者自待薄。待人亦薄。事事皆淡。故君子居常嗜好不可太濃艶。亦不宜太枯寂。

讀方 念頭濃なる者は自ら待つこと厚く、人を待つ

△陶鑄、支配と言ふ意なり萬物は造物者に造らる、されど君子は造物者の作りしものを變化する力を有するが故に其支配を受けず、

も亦厚く、處々皆濃なり。念頭淡き者は自ら待つこと薄く、人を待つことも亦薄く、事々皆淡し。故に君子は居常嗜好太だ濃艶なるべからず、宜しく亦太だ枯寂なるべからず。

彼富我仁。彼爵我義。君子固不爲君相所牢籠。人定勝天。志一動氣。君子亦不受造物之陶鑄。

讀方 彼は富、我は仁、彼は爵我は義、君子は固より君相の牢籠する所とならず。人定りて天に勝ち、志一なれば氣を動かす。君子は亦造物の陶鑄を受けず。

◎自ら恃すること高からざるべからず、
△羝羊、は雄羊なり、

◎眞に德を治め學に忠ならんとすれば功名の念吟咏の情を捨て心神を一所に收集せざるべからず、
△實詣、眞實の蘊奥、

立身不高一步立。如塵裡振衣泥中濯足。
如何超達。處世不退一步處。如飛蟻投燭。
羝羊觸藩。如何安樂。

讀方 身を立つるに一步を高くして立たずんば、塵裡に衣を振ひ、泥中に足を濯ふが如し、如何ぞ超達せん。世に處するに一步を退けて處らずんば、飛蛾の燭に投じ、羝羊の藩に觸るゝが如し、如何ぞ安樂ならん。

學者要收拾精神併歸一路。如修德而留意於事功名譽。必無實詣。讀書而寄興於吟咏風雅。定不深心。

△維摩居士、は印度の大德ある佛徒なり、
△屠劊、とは牛馬を屠り殺すことを業とするもの、
△茅檐、茅茨の家にて貧民の屋を云ふ、

讀方 學者は精神を收拾して一路に併歸するを要す。如し德を修めて意を事功名譽に留めば、必ず實詣なし、書を讀みて興を吟咏風雅に寄せば、定めて深心ならず。

人人有個大慈悲。維摩屠劊無二心也。處處有種眞趣味。金屋茅檐非兩地也。只是欲蔽情封。當面錯過。使咫尺千里矣。

讀方 人人個の大慈悲有り。維摩屠劊二心無し。處々種の眞趣味有り。金屋茅檐は兩地に非ず。只是れ慾に蔽はれ情に封ぜられ、當面に錯過せば、咫尺をして千里ならし

○欣羨の念は修道の障礙物にして貪着の心は經世濟國の士を過つものなり、

△雲水、行脚修行の僧、

む。

進德修道。要個木石的念頭。若一有欣羨便趨欲境。濟世經邦。要段雲水的趣味。若一有貪着便墮危機。

讀方　德を進め道を修むるには個の木石的念頭を要す。若し一び欣羨有らば便ち欲境に趨る。世を濟び邦を經するには、段の雲水的趣味を要す。若し一び貪着あらば便ち危機に墮つ。

△吉人は善人なり、

△凶人は惡人なり、

吉人無論作用安詳。即夢寐神魂。無非和氣。凶人無論行事狼戾。即聲音咳語。渾是殺機。

讀方　吉人は作用の安詳を論ずるなく、即ち夢寐神魂も和氣に非るは無し。凶人は行事の狼戾を論ずるなく、即ち聲音咳語も渾て是れ殺機。

△安詳、は平安なり、

△殺機、は和氣に反對するものなり、

肝受病則目不能視。腎受病。則耳不能聽。病受於人所不見。必發於人所共見。故君子欲無得罪於昭昭。先無得罪於冥冥。

讀方　肝病を受くれば則ち目視ること能はず、腎病を受くれば則ち耳聽くこと能はず。病は人の見ざる所に受け、必ず人の共に見る所に發す。故に君子罪を昭々に得るな

△昭々は顯明の地なり、

△冥々は幽闇の處なり、

きを欲せば、先づ罪を冥々に得ること無かれ。

福莫福於少事。禍莫禍於多心。唯苦事者。方知少事之爲福。唯平心者。始知多心之爲禍。

◎實境を踏まざれば眞を知ること難し、

讀方　福は事少なきより福なるは莫く。禍は心多きより禍なるはなし。唯だ事に苦しむ者、方に事少なきの福たるを知り、唯だ心を平にする者、始めて心多きの禍たるを知る。

◎治世經國の要訣を示す、△叔季之世、治にもあらず亂にもあらざる世を言ふ、

處治世宜方。處亂世宜圓。處叔季之世當方圓並用。待善人宜寬。待惡人宜嚴。待庸衆之人當寬嚴並存。

◎斯の如くする能はば恩怨自ら禍することなし、

讀方　治世に處するは宜しく方なるべし、亂世に處するには宜しく圓なるべし、叔季の世に處するには當に方圓並び用ゆべし。善人を待するは宜しく寬なるべし、惡人を待するには宜しく嚴なるべし、庸衆の人に待するには當に寬嚴並に存すべし。

我有功於人。不可念。而過則不可不念。人有恩於我。不可忘。而怨則不可不忘。

讀方　我れ人に功あらば念ふ可らず。而して過は則ち念はざるべからず。人我れに恩あらば、忘るべからず、

而して怨は則ち忘れざるべからず。

施恩者内不見己。外不見人則斗粟可當萬鍾之惠。利物者。計己之施。責人之報。雖百鎰難成一文之功。

◎前章と照應すべし、△鍾は六斛、四斗、八斛乃至十斛を云ふ、△鎰、二十兩乃至三十兩を云ふ、

讀方 恩を施す者、内己れを見ず、外人を見ざれば則ち斗粟も萬鍾の惠に當るべし。物を利する者、己れの施を計り、人の報を責めば、百鎰と雖も一文の功を成し難し。

◎讓歩は處世の秘訣なり、△際遇、は境遇なり、△情理、は心情氣分

人之際遇。有齊有不齊。而能使己獨齊乎。己之情理。有順有不順。而能使人皆順乎。以此相觀對治。亦是一方便法門。

讀方 人の際遇は齊しからざるあり、齊しからざるあり、而して能く己れをして獨り齊しからしめんか。己れの情理順なる有り、順ならざる有り、而して能く人をして皆順ならしめんか、此れを以て相觀對治せば、亦是れ一の方便法門なり。

◎聖賢の言行を見て直に之を借て假面を裝ひ私利を營むは甚だ危險なり、

心地乾淨。方可讀書學古。不然見一善行。竊以濟私。聞一善言。假以覆短。是又藉寇兵而齎盜粮矣。

讀方 心地を乾淨にして方に書を讀み、古を學ぶ可し。然らずんば一の善行を見ては竊みて以て私を濟し。一

の善言を聞いては假りて以て短を覆ふ。是れ又寇に兵を藉して盜に粮を齎すなり。

奢者富而不足。何如儉者貧而有餘。能者勞而府怨。何如拙者逸而全眞。

◎貧富と能拙とは外形によつて判すべきものにあらず、

讀方　奢る者は富みて足らず。何ぞ儉者の貧にして餘あるに如かん。能者は勞して怨を府む。何ぞ拙者の逸して眞を全うするに如かん。

◎實踐躬行せざれば讀書講學益なし、

讀書不見聖賢。爲鉛槧傭。居官不愛子民。爲衣冠盜。講學不尚躬行。爲口頭禪。立業不思種德。爲眼前花。

△鉛槧、書き取つて記憶に供することをいふ、

△眼前は目前と云ふ意なり、

讀方　書を讀んで聖賢を見ざれば鉛槧の傭と爲る。官にゐて子民を愛せざれば、衣冠の盜と爲る。學を講じて躬行を尚ばざれば口頭の禪と爲る。業を立てゝ種德を思はざれば眼前の花となる。

人心有一部眞文章。都被殘編斷簡封錮了。有一部眞皷吹。都被妖歌艶舞湮沒了。學者須掃除外物。直覓本來。纔有個眞受用。

讀方　人心に一部の眞文章あり、都て殘編斷簡に封錮し了らる。一部の眞皷吹有り、都て妖歌艶舞に湮沒し了ら

◎一切の外物を掃除し本來の眞を求むべし、

△殘編斷簡、古人先賢の糟粕と言ふ意、

△外物、とは殘編斷簡、妖歌艶舞をいふ、

る。學者須く外物を掃除して直に本來を覓むべし。纔に個の眞受用有らん。

苦心中常得悅心之趣。得意時便生失意之悲。

讀方　苦心の中常に悅心の趣を得。得意の時便ち失意の悲みを生ず。

富貴名譽自道德來者。如山林中花。自是舒除繁衍。自功業來者。如盆檻中花。便有遷徙廢興。若以權力得者。如瓶鉢中花。其

◎功業、權力より來る富貴名聲は道德より來るものに劣る、

根不植。其萎可立而待矣。

讀方　富貴名譽にして、道德より來る者は山林中の花の如し、自ら是れ舒徐繁衍す、功德より來る者は盆檻の花の如し、便ち遷徙廢興有り、若し權力を以て得る者は瓶鉢中の花の如し、其根植ゑざれば、其の萎むこと立ちどころにて待つ可し。

春至時和。花尚鋪一段好色。鳥且囀幾句好音。士君子幸列頭角。復遇溫飽。不思立好言行好事。雖是在世百年。恰似未生一日。

◎醉生夢死は人間の能事にあらず、好言好事を以て世を益し、人の模範たらざれば生存の價値なし、

◎歛束清苦に陷らず、瀟洒々脱に流れず、二者の中を得て始め經國濟民の實を擧ぐることを得、

△段々は一段の略、

△競業的心思、戰々兢々たる心、

△歛束、嚴重にもの

讀方 春至り時和げば花尙ほ一段の好色を鋪き、鳥且つ幾句の好音を囀ず。士君子幸に頭角を列ね、復た溫飽に過ひ、好言を立て、好事を行ふことを思はざれば、是れ世にあること百年なりと雖も、恰も未だ一日を生きざるに似たり。

學者有段競業的心思。又要有段瀟洒的趣味。若一味歛束清苦。是有秋殺無春生。何以發育萬物。

讀方 學者段の競業的の心思有り。又段の瀟洒的趣味あり、若し一味歛束清苦ならば、是れ秋殺あつて春生なし。

が束縛ずること、

◎老子の所謂「大辯は訥の如く、大巧は拙の如し」の意なり、

△歛器、は少し傾けろ水を盛る器にて、水滿ちれば覆へる、孔子は之を古人が滿を誡むるため作りしものと言へり、

△撲滿、土器で内に錢あり、錢を蓄ふるに用ゐる器なり。内部空虛なるを以て覆らず。

何を以て萬物を發育せん。

眞廉無廉名。立名者正所以爲貪。大巧無巧術。用術者乃所以爲拙。

讀方 眞廉は廉名無し。名を立つる者は正に貪たる所以なり。大巧は巧術なし、術を用ふるは乃ち拙たる所以なり。

歛器以滿覆。撲滿以空全。故君子寧居無不居。有寧處缺不處完。

讀方 歛器は滿を以て覆り、撲滿は空を以て全し。故に君子は寧ろ無に居て有に居らず、寧ろ缺に處して完に處せず。

△名根、名譽を得たしと云ふ精神、
△千乘、戰時車千乘を出し得る大國の王位を云ふ、
△一瓢、少し許りの飲物なり、
△剩技は無益なる技倆なり、
△厲鬼、とは幽靈のことにして怨靈邪鬼の如きものなり、

名根未拔者。縱輕千乘。甘一瓢。總墮塵情。
客氣未融者。雖澤四海利萬世。終爲剩技。

讀方　名根未だ拔けざる者は、縱ひ千乘を輕んじ一瓢を甘んずるも、總て塵情に墮つ、客氣未だ融せざる者は四海に澤し。萬世を利すと雖も終に剩技と爲る。

心體光明。暗室中有青天。念頭暗昧。白日下生厲鬼。

讀方　心體光明なれば暗室の中に青天あり。念頭暗昧なれば白日の下に厲鬼を生ず。

人知名位爲樂。不知無名無位之樂爲最眞。人知饑寒爲憂。不知不饑不寒之憂爲更甚。

△不饑不寒之憂は富豪貴顯の憂なり、

讀方　人名位の樂たるを知つて、名無く位なきの樂の最も眞たることを知らず、人饑寒の憂たるを知つて、饑えず寒えざるの憂、更に甚しきたることを知らず。

爲惡而畏人知。惡中猶有善路。爲善而急人知。善處卽是惡根。

讀方　惡を爲し人の知るを畏るは惡中猶善路あり。善を爲して人の知るを急にするは、善處卽ち是れ惡根なり。

天之機緘不測。抑而伸。伸而抑。皆是播弄

△天之機緘　俗に天機と言ふが如し、造物者の機密、

△播弄、は一時幸運なりしむるを云ふ、

△顚倒、倒錯すること、

△燥性、性質の燥急なるをいふ、

△寡恩、恩惠を施すことの寡いもの、

△凝滯固執者、事物に無暗に凝り執着する者をいふ、

英雄顚倒豪傑處。君子只是逆來順受。居安思危。天亦無所用其伎倆矣。

讀方　天の機緘は測られず、抑へて伸べ、伸べて抑ふ。皆是れ英雄を播弄し、豪傑を顚倒する處。君子は只是れ逆に來る處を順に受け、安に居て危きを思ふ、天も亦其の伎倆を用ふる所なし。

燥性者火熾。遇物則焚。寡恩者氷清。逢物必殺。凝滯固執者。如死水腐木。生機已絕。俱難建功業而延福祉。

讀方　燥性の者は火熾、物に遇へば則ち焚く。寡恩の者は氷清、物に遇へば必ず殺す。凝滯固執の者は、死水腐木の如し。生機已に絕ゆ、俱に功業を建て、福祉を延べ難し。

△殺機、他を害するの心、

△愆尤、過失を責むること、

△譏議、罵詈非難を云ふ、

福不可徼。養喜神以爲召福之本而已。禍不可避。去殺機以爲遠禍之方而已。

讀方　福は徼む可らず、喜神を養つて以て福を召く。禍の本と爲さんのみ。禍は避くべからず、殺機を去つて以て禍に遠ざかるの方と爲さんのみ。

十語九中未必稱奇。一語不中則愆尤駢集。十謀九成未必歸巧。一謀不成則訾議

叢興。君子所以寧默毋躁寧拙毋巧。

讀方　十語九中るも未だ必ずしも奇と稱せず、一語中らざれば則ち愆尤駢び集る。十謀九成るも未だ必ずしも功を歸せず、一謀成らざれば則ち訾議叢り興る。君子寧ろ默して躁なることなく、寧ろ拙にして巧なることなき所以なり。

天地之氣暖則生。寒則殺。故性氣清冷者。受亨亦涼薄。唯和氣熱心之人。其福亦厚。其澤亦長。

讀方　天地の氣暖なれば則ち生し、寒ければ則ち殺す。

△受亨、天より享くる所の福祉、

故に性氣清冷なる者は受亨亦涼薄なり。唯和氣熱心の人は其の福も亦厚く、其澤亦長し。

天理路上甚寬。稍游心。胸中便覺廣大宏朗。人欲路上甚窄。纔寄迹。眼前俱是荊棘泥塗。

讀方　天理路上は甚だ寬し、稍い心を遊ばせば、胸中便ち覺ゆ、廣大宏朗なることを。人欲路上は甚だ窄し。纔に迹を寄せば、眼前俱に是れ荊棘泥塗なり。

一苦一樂相磨練。練極而成福者。其福始久。一疑一信相參勘。勘極而成知者。其知

△天理路上、天地自然の大道をいふ、

◎苦樂嘗め盡して苦樂の何たるを知り、疑信の間に往來して始めて眞知を得、

△虚ならざれば眞理正義の如きもの入るを得ず、

△實へ充實し置かざれば物欲侵入し之が爲に心意を左右せらる、

◎人の長たるものは清濁併せ呑むの寛量なかるべからず、

始眞。

讀方 一苦一樂相磨練し。練極りて福を成すものは其の福始めて久し。一疑一信相參勘し、勘極つて知を成すものは其の知始めて眞なり。

心不可不虚。虚則義理來居。心不可不實。實則物欲不入。

讀方 心虚ならざるべからず、虚なれば則ち義理來り居る。心實にせざるべからず、實なれば則ち物欲入らず。

地之穢者多生物。水之清者常無魚。故君子當存含垢納汚之量。不可持好潔獨行之操。

讀方 地の穢れる者は多く物を生ず。水の清める者は常に魚無し。故に君子は常に垢を含み、汚を納るゝの量を存すべし、潔を好み、獨り行くの操を持す可からず。

泛駕之馬可就驅馳。躍冶之金。終歸型範。只一優游不振。便終身無個進步。白沙云爲人多病未足羞。一生無病是吾憂。眞確論也。

△泛駕之馬、車を覆すが如き悍馬、

△躍冶之金、鑄物師の鑄爐から躍り出すが如き金を言ふ、

△白砂、明の碩學なり、

讀方 泛駕の馬は驅馳に就く可く、躍冶の金は終に型範に歸す。只一優游して振はざれば、便ち終身個の進步な。

し、白沙云く人となつて多病なるは、未だ羞づるに足らず、一生病なきは是れ吾が憂なりと、眞に確論なり。

人只一念貪私便銷剛爲柔。塞智爲昏。變恩爲慘。染潔爲汚。壞了一生人品。故古人以不貪爲寶。所以度越一世。

◎貪は剛を銷し、智を塞き、人の德性を壞了す、

讀方　人只一念貪私なれば、便ち剛を銷して柔となし、智を塞いて昏となし、恩を變じて慘となし、潔を染めて汚と爲し、一生の人品を壞了す。故に古人は貪らざるを以て寶となす、一世に度越する所以なり。

耳目見聞爲外賊。情欲意識爲內賊。只是主人翁惺惺不昧。獨坐中堂。賊便化爲家人矣。

△惺々は明瞭のことなり、

讀方　耳目見聞は外賊たり。情慾意識は內賊たり。只是れ主人翁惺々不昧にして、中堂に獨坐せば、賊便ち化して家人とならん。

圖未就之功。不如保已成之業。悔既往之失。不如防將來之非。

△高曠、高尙にして

讀方　未だ就らざるの功を圖るは、已に成るの業を保つに如かず。既往の失を悔ゆるは將來の非を防に如かず。

氣象要高曠。而不可疎狂。心思要縝密。而

而かも事物に拘泥せざるをいふ、
△縝密、は周縝緻密なり、
△瑣屑、思慮細密に過ぐるをいふ、
△沖淡、淡白にしてアッサリと言ふ意、
△偏枯、淡はよし、されど冷淡に過ぎて枯なるは不可なり、
◎風の如く來り風の如く去るを心靈工夫の第一とす、事物に執着せず、變轉自在なるを要す、

不可瑣屑趣味要沖淡而不可偏枯操守要嚴明而不可激烈

讀方　氣象は高曠を要す、而も疏狂なる可らず。心思は縝密を要す而も瑣屑なるべからず。趣味は沖淡を要す、而も偏枯なる可らず。操守は嚴明を要す、而も激烈なる可らず。

風來疎竹風過而竹不留聲雁度寒潭雁去而潭不留影故君子事來而心始現事去而心隨空

讀方　風疎竹に來る、風過ぎて竹聲を留めず。雁寒潭を度る、雁去りて潭影を留めず。故に君子は事來りて心始めて現はれ、事去りて心隨つて空し。

清能有容仁能善斷明不傷察直不過矯是謂蜜餞不甜海味不鹹纔是懿德

讀方　清能く容るゝことあり。仁能く斷を善くす。明は察を傷らず、直は矯に過ぎず、是を蜜餞甜からず、海味鹹ならずと謂ふ。纔に是れ懿德なり。

貧家淨拂地貧女淨梳頭景色雖不艷麗氣度自是風雅士君子一當窮愁寥落奈何輒自廢弛哉

△懿德、過不及のなき至極中庸を得た美德を言ふ、
◎士君子が窮愁寥落の境に對する覺悟、

△間中、は閑暇にてなすことなきをいふ、
△受用、自由の働を言ふ、
△落空、空寂虛心なること、
◎禍福爲福、起死回生の秘訣を示す、

讀方　貧家も淨く地を拂ひ、貧女淨く頭を梳れば、景色艶麗ならずと雖も、氣度自ら是れ風雅なり。士君子一たび窮愁寥落に當つて、奈何ぞ輙ち自ら廢弛せんや。

間中不放過。忙處有受用。靜中不落空。動處有受用。暗中不欺隱。明處有受用。

讀方　間中に放過せざれば、忙處に受用あり。靜中に落空せざれば、動處に受用あり。暗中に欺隱せざれば、明處に受用あり。

念頭起處。纔覺向欲路上去。便挽從理路上來。一起便覺。一覺便轉。此是轉禍爲福。

△欲路上、私欲の方向に、
△理路上、正義及び道理の方向に、
◎觀心證道とは心神の眞體を見、眞機を識り、眞味を得ることなり、

起死回生的關頭。切莫輕易放過。

讀方　念頭起る處纔に欲路上に向つて去るを覺らば、便ち挽いて理路上より來たせ。一たび起つて便ち覺り、一たび覺つて便ち轉ず、此れは是れ禍を轉じて福となし、死を起じて生を回す的の關頭なり。切に輕易に放過すること莫かれ。

靜中念慮澄徹。見心之眞體。間中氣象從容。識心之眞機。淡中意趣冲夷。得心之眞味。觀心證道。無如此三者。

讀方　靜中の念慮澄徹なれば、心の眞體を見る。間中の

氣象從容なれば、心の眞機を識る。淡中の意趣冲夷なれば、心の眞味を得。心を觀、道を證るは此の三者に如くはなし。

◎動中靜あり、苦中樂あらざれば、心體の眞機に隔れしものと言ひ難し、

靜中靜非眞靜。動處靜得來。纔是性天之眞境。樂處樂非眞樂。苦中樂得來。纔見心體之眞機。

讀方　靜中の靜は眞の靜にあらず、動處に靜を得來つて纔に是れ性天の眞境なり。樂處の樂は眞の樂にあらず。苦中に樂を得來つて纔に心體の眞機を見る。

舍己毋處其疑。處其疑卽所舍之志多愧矣。施人毋責其報。責其報。併所舍之心俱非矣。

讀方　己を舍ては其疑を處すると毋れ。其疑を處すれば卽ち舍つる所の志多く愧づ。人に施しては其報を責ると毋れ。其報を責れば舍つる所の心を併せて俱に非なり。

天薄我以福。吾厚吾德以迓之。天勞我以形。吾逸吾心以補之。天阨我以遇。吾亨吾道以通之。天且奈我何哉。

讀方　天我を薄するに福を以てせば、吾れ吾が德を厚くして以て之を迓へ、天我を勞するに形を以つてせば、吾

◎天運如何に我を遇するも、只吾が信ずる道によつて進むべし、

れ吾が心を逸して以て之を補ひ、天我を阨するに遇を以てせば、吾れ吾が道を亨らしめて以て之を通せしめば、天も且つ我を奈何せんや。

貞士無心徼福。天卽就無心處歸其衷。儉人着意避禍。天卽就着意中奪其魄。可見天之機權最神。人之智巧何益。

△歸其衷、其衷心を開き事の成就するやうに仕向ける。
△儉人、奸惡陰險の人、
△機權、機用及び權能を云ふ、

讀方　貞士は心福を徼むること無し。天は卽ち無心の處に就いて其の衷を歸く。儉人は意を禍を避くるに着く、天は卽ち着意の中に就いて其魂を奪ふ。見るべし、天の機權は最も神にして人の智巧は何ぞ益あらん。

聲妓晚景從良。一世之胭花無碍。貞婦白頭失守。半生之清苦俱非。語云看人只看後半截。眞名言也。

△晚景從良、晚年に良人に嫁し眞面目なる生活をすれば、以前に淫靡なる生活をなすも何の障害ともならずと云ふ意なり、
△後半截は後半世なり、

讀方　聲妓晚景に良に從へば、一世の胭花碍りなし。貞婦白頭に守を失へば、半生の清苦俱に非なり、語に云く人を看るには只後半截を看よと、眞に名言なり。

平民肯種德施惠。便是無位的公相。士夫徒貪權市寵。竟成有爵的乞人。

讀方　平民肯て德を植ゑ惠を施さば、便ち是れ無位的の公相なり。士夫徒らに權を貪り寵を市らば、竟に有爵的

の乞人と成る。

問祖宗之德澤。吾身所享者是。當念其積累之難。問子孫之福祉。吾身所貽者是。要思其傾覆之易。

讀方　祖宗の德澤を問はゞ、吾が身享くる所のもの是れなり。當に其積累の難さを念ふべし。子孫の福祉を問はゞ、吾が身貽す所の者是なり。其の傾覆の易さを思ふことを要す。

君子而詐善。無異小人之肆惡。君子而改節。不及小人之自新。

◎君子の僞善は其害恐らくは小人の惡を恣にするより甚し、

讀方　君子にして善を詐るは、小人の惡を肆にするに異る無し、君子にして節を改むるは小人の自ら新にするに及ばず。

家人有過。不宜暴怒。不宜輕棄。此事難言。借他事隱諷之。今日不悟俟來日再警之。如春風解凍。如和氣消氷。纔是家庭的型範。

讀方　家人過有らば宜しく暴怒すべからず、宜しく輕棄すべからず。此の事言ひ難くば、他の事を借つて隱に之を諷せよ。今日悟らずば、來日を俟つて再び之を警め

◎家人を敎ゆるには處世上必要のことなれば意を盡すべし、△型範、模範なり、

よ。春風の凍を解くが如く、和氣の氷を消すが如し。纔に是れ家庭的の型範なり。

此心常看得圓滿。天下自無缺陷之世界。

此心常放得寛平。天下自無險側之人情。

◎此章は直に之を「萬街人皆聖人」の註解と見て可なり、俗に「廻る世界に鬼はなし」と云ふに異らず、

讀方　此の心常に看得て圓滿ならば天下自ら缺陷の世界なし。此心常に放ち得て寛平ならば、天下自ら險測の人情無し。

◎他人の毀譽褒貶によつて其守る處を變ずる勿れ、

澹泊之士必爲濃艶者所疑。檢飾之人多爲放肆者所忌。君子處此固不可少變其操履。亦不可太露其鋒芒。

△檢飾の士、は謹愼嚴肅なる人をいふ、

△周身、自分の周圍をいふ、

△鍼砭藥石、鍼は金の針、砭は石の針、石は昔し病を治する爲め溫めて懷に入れ、より藥石といふに至りしなり、

△滿前悉兵刃戈矛は眼前のこと皆悉く兵刃戈矛となるといふ意なり、

讀方　澹泊の士は必ず濃艶の者の爲に疑はれ。檢飾の人は多く放肆の者の爲に忌まる。君子此に處して固より少しも其の操履を變ずべからず。亦太だ其鋒芒を露すべからず。

居逆境中。周身皆鍼砭藥石。砥節礪行而不覺。處順境內。萬前盡兵刃戈矛。銷膏靡骨而不知。

讀方　逆境の中に居れば周身皆鍼砭藥石、節を砥ぎ行を礪いて覺えず。順境の內に處れば滿前悉く兵刃戈矛、膏を銷し骨を靡して知らず。

◎嗜欲と權勢は清冷の趣味を加へざれば鵠自他に及ぶ、
△清冷氣味、は清廉冷靜なる心念を云ふ、

◎前半は古語の「陽氣發する所金石も亦透る、精神一到何事か成らざらん」と同義なり、

生長富貴叢中的嗜欲如猛火。權勢似烈焰。若不帶些清冷氣味。其火焰不至焚人。必將自爍矣。

讀方 富貴叢中に生長する的の嗜欲は猛火の如く、權勢は烈焰に似たり。若し些の清冷の氣味を帶びざれば、其火焰人を焚くに至らざれば、必ず自ら爍かれんとす。

人心一眞。便霜可飛。城可隕。金石可貫。若僞妄之人。形骸徒具。眞宰已亡。對人則面目可憎。獨居則形影自媿。

△本然は本來自然の儘、

△幻迹、夢幻の如く、

讀方 人心の一眞便ち霜飛ばすべく、城隕すべく、金石貫くべし。僞妄の人の若きは形骸徒らに具はるも眞宰已に亡ぶ。人に對すれば則ち面目憎むべく、獨居すれば則ち形骸自ら媿づ。

文章做到極處。無有他奇。只是恰好。人品做到極處。無有他異。只是本然。

讀方 文章極處に做し到つて、他奇あることなし、只是れ恰好。人品極處に做し到つて、他異有ることなし、只是れ本然。

以幻迹言。無論功名富貴。卽肢體亦屬委

眼に顯はれたる形迹を云ふ、
△眞境、本眞の實體なり、
△世間之韁鎖、世間の名聞利欲の如き束縛を云ふ、

形。以眞境言。無論父母兄弟。卽萬物皆吾一體。人能看得破認得眞。纔可任天下之負擔。亦可脫世間之韁鎖。

讀方 幻迹を以て言へば功名富貴を論ずるなく、即ち肢體も亦委形に屬す。眞境を以て言へば父母兄弟を論ずる無く、即ち萬物皆吾が一體なり。人能く看得て破り、認得して眞ならば、纔に天下の負擔に任ふ可く、亦世間の韁鎖を脫す可し。

爽口之味皆爛腸腐骨之藥。五分便無殃。快心之事悉敗身喪德之媒。五分便無悔。

◎爽口の味と快心の事は溺れざれば敗身失德の憂なし、

△爽口之味、旨いと思ふ食物、

讀方 爽口の味は皆爛腸腐骨の藥なり、五分ならば便ち殃無し、快心の事は悉く敗身喪德の媒なり、五分ならば便ち悔無し。

◎人を恕するは自己の德を養ふのみならず、害に遠ざかるものなり、

不責人小過。不發人陰私。不念人舊惡。三者可以養德。亦可以遠害。

讀方 人の小過を責めず、人の陰私を發かず、人の舊惡を念はず。三つの者以て德を養ふべく、亦以て害に遠かるべし。

士君子持身不可輕。輕則物能撓我。而無悠閒鎭定之趣。用意不可重。重則我爲物

◎身を持するこゝは高く且つ重からざるべからず、意を用ふるこゝ重ければ瀟洒活潑の機なし、

◎天地は長く人生は短し虚生の憂を召くべからず、
△有生之樂、此世に生きて居るといふ樂、
△虚生之憂、醉生夢死するの憂、

泥而。無瀟洒活潑之機。

讀方 士君子身を持つは輕くすべからず、輕ければ則ち物能く我を撓まして悠閒鎮定の趣無し。意を用ふるは重くす可らず、重ければ即ち我れ物の爲に泥められて瀟洒活潑の機無し。

天地有萬古。此身不再得。人生只百年。此日最易過。幸生其間者。不可不知有生之樂。亦不可不懷虚生之憂。

讀方 天地に萬古あるも此の身は再び得られず。人生は只百年なるも、此日最も過ぎ易し。幸に其の間に生るもの

◎恩怨は禍を召く本なり、宜しく恩仇の境を超脱することを要す、

◎少壯盛時に身を慎まざれば老後に至つて恨多し、

者は有生の樂あるを知らざるべからず。亦虚生の憂を懷はざるべからず。

怨因德彰。故使人德我。不若德怨之兩忘。仇因恩立。故使人知恩。不若恩仇之俱泯。

讀方 怨は德に因つて彰はる。故に人をして我を德とせしむるは、德怨兩つながら忘るゝに若かず、仇は恩に因つて立つ。故に人をして恩を知らしむるは、恩仇の俱に泯ぶるに若かず。

老來疾病都是壯時招的。衰後罪孽都是盛時作的。故持盈履滿君子尤兢兢焉。

△兢々、は戒々兢々と繼く字にて小心翼々身を慎むことを云ふ、

◎私恩を市り、新知を結び、榮名奇節を尚ぶは凡庸のこと謹まざるべからず、

◎公平正論に私情を挾むべからず、私利を見て權門に出入すべからず、

讀方　老來の疾病は都て是れ壯時に招く的なり。衰後の罪孽は都て是れ盛時に作す的なり。故に盈を持し滿を履むは君子尤も兢々たり。

市私恩不如扶公議。結新知不如敦舊好。立榮名不如種隱德。尚奇節不如謹庸行。公平正論不可犯手。一犯則貽羞萬世。權門私竇不可着脚。一着則點汚終身。

△私竇、私利を得らるゝ家、

◎曲げて人情に從ふなかれ、實なくして名を收むるなかれ、

◎骨肉近親の變に對して從容たるべく、朋友の失に遇つては剴切なるべし、

讀方　公平正論は手を犯すべからず、一たび犯せば即ち羞を萬世に貽す。權門私竇は脚を着く可からず、一たび着くれば則ち終身を點汚す。

曲意而使人喜。不若直躬而使人忌。無善而致人譽。不若無惡而致人毀。

讀方　意を曲げて人をして喜ばしむるは、躬を直くして人をして忌ましむるに若かず。善無くして人の譽を致すは、惡無くして人の毀を致すに若かず。

處父兄骨肉之變宜從容。不宜激烈。遇朋友交遊之失宜剴切。不宜優游。

△從容、悠然として居ること、
△剴切、痛切とか切實とかいふ意なり、
△優游、從容として急がざるをいふ、
△小處不滲漏。小事にも氣を注ぐことをいふ、

◎歡苦恩仇のこと數量によつて量るべからず、

讀方　父兄骨肉の變に處しては宜しく從容なるべし、宜しく激烈なる可らず。朋友交遊の失に遇ひては、宜しく剴切なるべし、宜しく優游なるべからず。

小處不滲漏。暗中不欺隱。末路不怠荒。纔是個眞正英雄。

讀方　小處滲漏せず、暗中欺隱せず、末路怠荒せず。纔に是れ個の眞正の英雄なり。

千金難結一時之歡。一飯竟致終身之感。蓋愛重反爲仇。薄極翻成喜也。

讀方　千金も一時の歡を結び難く、一飯竟に終身の感を致す。蓋愛重なれば反つて仇と爲り。薄極つて翻て喜を成す。

◎君子は愚なるが如く、能あり慶は爪を隱すとは此句の俗解なり、
△一壺、中流にて舟を失ひ一時は一壺も千金萬金の價あり、
△三窟、戰國策に狡兎に三窟あり僅に其の死を免るとあり、
◎盛滿の中に衰微あり零落の中に發芽の機械あり、一時の盛衰興亡憂とするに足らず忍は最終の勝利を得べし、

藏巧於拙。用晦而明。寓清之濁。以屈爲伸。眞涉世之一壺。藏身之三窟也。

讀方　巧を拙に藏し、晦を用ひて明にし、清を濁に寓せ、屈を以て伸と爲す、眞に世を涉るの一壺、身を藏すの三窟なり。

衰颯的景象。就在盛滿中。發生的機械。卽在零落內。故君子居安宜操一心以慮患。處變當堅百忍以圖成。

△衰颯的景象、衰弱の兆を言ふ、

△恒久、永久不變の意なり、

◎怒火慾水沸騰する時猛然自省せば怒火慾水も忽ち避じて身を護る眞君となる、

讀方 衰颯的の景象は、就ち盛滿の中にあり、發生的の機緘は即ち零落の内に在り、故に君子安きに居ては宜しく一心を操つて以て患を慮るべし。變に處しては當に百忍を堅うして以て成るを圖るべし。

驚奇喜異者無遠大之識。苦節獨行者非恒久之操。

讀方 奇に驚き異を喜ぶ者は遠大の識なく、苦節獨行の者は恒久の操にあらず。

當怒火慾水正騰沸處。明明知得。又明明犯着。知的是誰。犯的又是誰。此處能猛然轉念。邪魔便爲眞君矣。

讀方 怒火慾水正に騰沸の處に當り、明明に知得し、又明明に犯着す。知る的は是れ誰ぞ、犯す的は又是れ誰ぞ、此の處猛然として念を轉ぜば邪魔便ち眞君と爲らん。

毋偏信而爲奸所欺。毋自任而爲氣所使。毋以己之長而形人之短。毋因己之拙而忌人之能。

讀方 偏信して奸に欺むかるゝこと毋かれ。自任して氣に使はるゝこと毋かれ。己れの長を以つて、人の短を形はすこと毋かれ。己れの拙に因つて、人の能を忌むこと毋

△爲氣所使、氣は客氣と言ふが如し、英雄豪傑的の人物が陷る過失なり、

◎人の短を暴くは己の短を以て人の短を攻むるものなり人の頑を忿るは己の頑を以て人の頑を遂げしむるものなり謹まざるべからず、

△沈々不語之士、沈默して口をきかぬ人を云ふ、
△悻々自好之人、服かれ。

人之短處要曲爲彌縫。如暴而揚之。是以短攻短。人有頑的要善爲化誨。如忿而疾之。是以頑濟頑。

讀方　人の短處は曲さに彌縫を爲すを要す。如し暴いて之を揚ぐれば是れ短を以て短を攻むるなり。人頑有る的は善く化誨を爲すを要す。如し忿りて之を疾まば是れ頑を以て頑を濟さしむものなり。

遇沉沉不語之士。且莫輸心。見悻悻自好之人。應須防口。

△昏散、幽鬱に沈むを云ふ、
△喫緊、精神の引き緊りしをいふ、
△憧々、心神散亂するを云ふ、
△氣機、天地の氣機（ハタラキ）を云ふ、
藏なく直言して自ら喜ぶ人、

讀方　沈々不語の士に遇はゞ且く心を輸す莫かれ。悻々自ら好するの人を見ば、應に須く口を防ぐべし。

念頭昏散處。要知提醒。念頭喫緊時。要知放下。不然恐去昏昏之病。又來憧憧之擾矣。

讀方　念頭昏散の處は提醒を知らんことを要す。念頭喫緊の時は放下を知らんことを要す。然らずんば恐くは昏々の病を去つて又憧々の擾を來さん。

霽日青天。倏變爲迅雷震電。疾風怒雨。倏轉爲朗月晴空。氣機何常。一毫凝滯太虛

△忍、は忍耐、
△識、は知識を云ふ、
△力、は意力なり、

何常。一毫障塞人心之體亦當如是。

讀方 霽日青天も倏ち變じて迅雷震電と爲り、疾風怒雨も倏ち轉じて朗月晴空と爲る。氣機何ぞ常あらん。一毫の凝滯大虚何ぞ常あらん。一毫の障塞、人心の體も亦當に是の如くなるべし。

勝私制欲之功有曰識不早力不易者。有曰識得破忍不過者。蓋識是一顆照魔的明珠。力是一把斬魔的慧劍。兩不可少也。

讀方 私に勝ち慾を制するの功は識ること早からざれば、力易からずと曰ふ者あり。識り得て破るも忍過ぎず。

◎喜怒哀樂を色に現はさゞることは大人物にあらざれば眞になし得ざることなり、

△鑪錘、鑪は金屬類を溶かすに用ふる器、錘は金屬類を煆ふる器なり、

と曰ふ者有り、蓋し識は是れ一顆照魔的の明珠。力は是れ一把斬魔的の慧劍兩ながら少ぐべからず。

覺人之詐不形於言。受人之侮不動於色。此中有無窮意味。亦有無窮受用。

讀方 人の詐を覺つて、言に形ざず。人の侮を受けて色に動かさず。此の中に無盡の意味あり。又無窮の受用あり。

横逆困窮是煆煉豪傑的一副鑪錘。能受其煆煉。則身心交益。不受其煆煉。則身心交損。

△變理的工夫、變轉自在の工夫と言ふが如し、
△敦睦的氣象、和合和睦といふ意なり、
△氛疹、惱み憂ふると、

讀方 横逆困窮は是れ豪傑を煅煉する的の一副の鑪鎚なり。能く其の煅煉を受くれば則ち身心交々益す、其の煅煉を受けざれば則ち身心交々損す。

吾身一小天地也。使喜怒不徳。好惡有則。便是變理的功夫。天地一大父母也。使民無怨咨物無氛疹。亦是敦睦的氣象。

讀方 我が身は一小天地なり。喜怒をして徳らず、好意をして則有らしめば、則ち是れ變理的の工夫。天地は一大父母なり。民をして怨咨無く、物をして氛疹なからしめば、亦是れ敦睦的の氣象。

△防人、他人の害を防ぐなり、
△察、推察臆測の深きを云ふなり、
△群疑、多衆者の反對疑惑をいふ、

害人之心不可有。防人之心不可無。此戒疎於慮也。寧受人之欺毋逆人之詐。此警傷於察也。二語並存。精明而渾厚矣。

讀方 人を害するの心はあるべからず。人を防ぐの心は無かるべからず。此れ慮に疎きを戒むるなり。寧ろ人の欺きを受くるも、人の詐を逆ふる毋れ。此れ察に傷るゝを警むるなり。二語並び存せば、精明にして渾厚ならん。

毋因群疑而阻獨見。毋任己意而廢人言。毋私小惠而傷大體。毋借公論以快私情。

△媒孽、後に至つて蜂起し來る禍なり、

讀方 群疑に因つて獨見を阻むることなかれ。己の意に任せて人言を廢することなかれ。小惠を私して大體を傷ること毋れ。公論を借りて以つて私情を快くすること毋れ。

善人未レ能二急親一。不レ宜二預揚一。恐來二讒譖之奸一。惡人未レ能二輕去一。不レ宜二先發一。恐招二媒孽之禍一。

讀方 善人未だ急に親むこと能はざれば、宜しく預めく揚ぐべからず、恐らくは讒譖の奸を來さん。惡人未だ輕々しく去る能はざれば、宜しく先づ發すべからず、恐らくは媒孽の禍を招かん。

△暗室屋漏、人の見ざる所を云ふ、

△市道、利害得失を單位にしたる商賣的の行爲なり、

青天白日的節義。自二暗室屋漏中一培來。旋乾轉坤的經綸。自二臨深履薄處一操出。

讀方 青天白日的の節義は暗室屋漏の中より培ひ來る。旋乾轉坤的の經綸は臨深履薄の處より繰り出す。

父慈子孝。兄友弟恭。縱做二到極處一。俱是合當一。如此。着二不一得一毫感激的念頭一。如施者任德。受者懷恩。便是路人便成二市道一矣。

讀方 父は慈、子は孝、兄は友、弟は恭、縱ひ極處になし到るも、俱に是れ合に當に此の如くなるべし。一毫感激的の念頭を着け得ず、如し施す者は德に任じ、受くる

者は恩を懷はゞ、便ち是れ路人も便ち市道とならん。

有妍必有醜爲之對。我不誇妍誰能醜我。有潔必有汚爲之仇。我不好潔誰能汚我。

讀方 研有れば必ず醜有つて之れが對を爲す。我れ妍に誇らずんば誰か能く我を醜とせん。潔有れば必ず汚有て之が仇を爲す。我れ潔を好まずんば誰か能く我を汚さん。

炎涼之態。富貴更甚於貧賤。妬忌之心。骨肉尤狠於外人。此處若不當以冷腸御以平氣。鮮不日坐煩惱障中矣。

讀方 炎涼の態、富貴は更に貧賤より甚し。妬忌の心は骨肉尤も外人より狠し。此の處當るに冷腸を以つてし、御するに平氣以つてせざれば、日に煩惱障の中に坐せざること鮮からん。

◎研醜、清汚は比較相對のことなり、

△炎涼之態、心情の變ずることを云ふ、

功過不容少混。混則人懷惰墮之心。恩仇不可大明。明則人起携貳之志。

讀方 功過は少しも混す容からず。混ずれば則ち人惰墮の心を懷く、恩仇は大に明かにすべからず。明かにすれば則ち人携貳の志を起す。

爵位不宜太盛。太盛則危。能事不宜盡畢。盡畢則衰。行誼不宜過高。過高則謗興而

△携貳、其人を捨て去ることを云ふ、

○爵位、才能、行誼凡て盈滿は危し、

毀來。

讀方 爵位は宜しく太だ盛なるべからず、太だ盛なれば則ち危し。能事は盡く畢るべからず。盡く畢れば則ち衰ふ。行誼過ぎて高かるべからず。過ぎて高ければ則ち謗興りて毀來る。

◎惡は隱るゝを忌み、善は顯はるゝを忌む、

惡忌陰。善忌陽。故惡之顯者。禍淺而隱者功大。禍深。善之顯者。功小而隱者功大。

讀方 惡は陰るゝを忌み、善は陽はるゝを忌む。故に惡の顯はるゝ者は禍淺くして隱るゝ者は禍深し。善の顯はるゝ者は功小にして隱るゝ者は功大なり。

△魍魎、怪物惡鬼を云ふ、

△猖狂、私利私慾を行ふこと、

◎貪むること酷なれば却つて禍を釀す、

德者才之主。才者德之奴。有才無德。如家無主而奴用事矣。幾何不魍魎而猖狂。

讀方 德は才の主。才は德の奴。才あつて德なきは家に主なくして奴事を用ふるが如し。幾何か魍魎して猖狂せざらん。

鋤奸杜倖。要放他一條去路。若使之一無所容。譬如塞鼠穴者。一切去路都塞盡。則一切好物俱咬破矣。

讀方 奸を鋤き倖を杜ぐは、他の一條の去路を放たんことを要す。若し之をして一も容るゝ所無からしめば、譬

◎此章は所謂處世法の秘訣を説く、
◎困苦は人と共にすることを得れども安樂を俱にすること甚だ難し、

△提醒、忠告して覺醒さすこと、
△解救、疑惑を解決救濟すること、

へば鼠穴を塞ぐ者の如し。一切の去路都て塞ぎ盡せば則ち一切の好物俱に咬み破らる。

當與人同過。不當與人同功。同功則相忌。
可與人共患難。不可與人共安樂。安樂則相仇。

讀方　當に人と過を同うすべし、當に人と功を同うすべからず。功を同うすれば則ち相忌む。人と患難を共にすべし。人と安樂を共にすべからず。安樂なれば則ち相仇す。

士君子貧不能濟物者。遇人癡迷處出一言提醒之。遇人急難處出一言解救之。亦是無量功德。

讀方　士君子貧にして物を濟ふと能はざる者は、人の癡迷の處に遇へば、一言を出して之を提醒し、人の急難の處に遇へば、一言を出して之を解救す、亦た是無量の功德。

△癡、富貴をいふ、
△寒、懷中の不如意なることを云ふ、
◎蟻の甘きを求むるが如きは人情の弱點なり、

饑則附。飽則颺。燠則趨。寒則棄。人情通患也。

讀方　饑れば則ち附き、飽けば則ち颺り。燠かなれば則ち趨り、寒ければ則ち棄つ、人情の通患なり。

君子宜淨拭冷眼。慎勿輕動剛腸。

△冷眼、公平無私な

る心、
△剛腸、鐵石の如き心をいふ、
◎德の大小は度量によつて定り、度量は見識によつて定る、
△量は、度量のこと、
△識、とは見識のこと、
△寂寂、靜寂と言ふが如し、
△混沌、夜間睡眠の間は身心休息し善惡苦樂全く無差別なること天地未だ開けざる混沌時代に異ることなし、
△桎梏云々、耳目口鼻は心身を束縛する桎梏なり、
△機械云々、情欲嗜好は悉く人心を墮落せしむる機械なり、
◎衆善、諸惡の根源は些々たる自己の態度にあり、

讀方　君子は宜しく冷眼を淨拭すべし。愼んで輕しく剛腸を動かすこと勿れ。

德隨レ量進。量由レ識長。故欲レ厚二其德一。不レ可レ不レ弘二其量一。欲レ弘二其量一。不レ可レ不レ大二其識一。

讀方　德は量に隨つて進み、量は識に由つて長ず。故に其の德を厚くせんと欲せば、其の量を弘くせざるべらず。其量を弘くせんと欲せば、其識を大にせざるべからず。

一燈熒然萬籟無レ聲。此吾人初入二寂寂一時也。曉夢初醒群動未レ起。此吾人初出二混沌一處也。乘レ此而一念廻レ光。烱然返照。始知二耳目口鼻皆桎梏而情欲嗜好悉機械一矣。

讀方　一燈熒然として萬籟聲無し。此れ吾人初めて寂寂に入るの時なり。曉夢初めて醒め群動未だ起らず。此れ吾人初めて混沌を出づるの處なり。此れに乘じて一念光を回らし、烱然として反照せば、始めて耳目口鼻は皆桎梏にして情欲嗜好は悉く機械なることを知る。

反レ己者觸レ事皆成二藥石一。尤人者動レ念卽是戈矛。一以闢衆善之路。一以濬諸惡之源。相去霄壤矣。

讀方　己れに反する者は事に觸れて皆藥石となる。人を

△隨身銷毀、其身殁すれば自然消滅すると云ふこと、

△精神、君子聖人の精神、

△氣節、忠臣貞士の氣節、

△彼は事業、文章功名富貴を云ふ、

△此は精神氣節を云ふ、

尤むる者は、念を動せば、悉く是れ戈矛。一は以つて衆善の路を闢き、一は以て諸惡の源を濬くす。相ひ去ること霄壤なり。

事業文章隨身鎖毀。而精神萬古如新。功名富貴逐世轉移。而氣節千載一日。君子信不當以彼易此也。

讀方　事業文章は身に隨つて銷毀す。而して精神は萬古新なるが如し。功名富貴は世を逐うて轉移す。而して氣節は千載一日なり。君子信に當に彼を以て此に易ふべからず。

△魚網之沒鴻則羅其中、とは詩經の語なり、魚網を設け鴻の之に羅るは意外の獲物なり、

△螳蜋之貪雀又乘其後、とは吳越春秋及び說苑に出づ、螳蜋は他の虫を捕るに其心を專はれ、黃雀却つて己を窺ふを知らず是れ又意外の事なり、

△花子、雛人形なり、

△段、一段又は一點と云ふ意なり、

△點、は一點なり、

△木人、は木偶なり、

魚網之設。鴻則羅其中。螳蜋之貪。雀又乘其後。機裡藏機。變外生變。智巧何足恃哉。

讀方　魚網の設け、鴻は則ち其中に羅る。螳蜋の貪り、雀又其の後に乘ず。機裡に藏し、變外に變を生ず、智巧何ぞ恃むに足らんや。

作人無點眞懇念頭。便成個花子。事事皆虛。涉世無段圓活機趣。便是個木人。處處有碍。

讀方　人と作るに點の眞懇念頭なければ便ち個の花子となり、事々皆虛なり。世を涉るに段の圓活の機趣なければ

△機趣、機轉、臨機應變の意なり、

◎煩惱妄想を去れば本來清淨の光現出す、歡樂故意に求むべき者にあらず、私慾我見を除き去れば歡樂自然に現はる、

△一言一行を謹まざ

ば、便ち是れ個の木人なり。處々に碍り有り。

水不波則自定。鑑不翳則自明。故心無可清。去其混之者而清自現。樂不必尋。去其苦之者而樂自存。

讀方 水波たゝざれば則ち自ら定まる。鑑は翳らさゞれば則ち自ら明かなり。故に心は清す可きなし。其の之を混らす者を去て、清自ら現ず。樂は必らずしも尋ねず。其の之を苦しむる者を去つて、樂自ら存す。

有一念而犯鬼神之禁。一言而傷天地之

れば天地の和を傷け、累を子孫に遺す、

◎此一章は人を教化し使役するには緩急宜しきを得ざるべからず、急なれば怨を招き、切なれば頑を助長す、

△白、は明白なり、

△操、は使役命令する、こと、

和。一事而釀子孫之禍者。最宜切戒。

讀方 一念にして鬼神の禁を犯し、一言にして天地の和を傷り、一事にして子孫の禍を釀す者有り。最も宜しく切に戒しむべし。

事有急之不白者。寛之或自明。毋躁急以速其忿。人有操之不從者。縱之或自化。毋操切以益其頑。

讀方 事之を急にして白ならざるものあり。之を寛にせば或は自明かならん。躁急にして以て其の忿を速く毋れ。人之を操つて從はざる者あり。之を縱せば、或は自

ら化せん。操ること切にして以て其の頑を益すこと毋れ。

節義傲青雲。文章高白雪。若不以德性陶鎔之。終爲血氣之私技能之末。

◎德性高からされば節義も文章も私欲末技に過ぎず、
△陶鎔、陶は土を燒いて器を造ること、鎔は金屬をとかすことなり、事物を練り出すことを云ふ、

讀方　節義青雲に傲り、文章白雪よりも高きも、若し德性を以つて之を陶鎔せざれば、終に血氣の私、技能の末となる。

謝事當謝於正盛之時。居身宜居於獨後之地。

△謝、辭するとか退くとか云ふ意なり、
△獨後之地。競爭者のない地位、

讀方　事を謝するは當に正盛の時に謝すべし。身を居くは宜しく獨後の地に居くべし。

謹德須謹於至微之事。施恩務施於不報之人。

◎身を謹んで小心なれ、報を得んとして恩を施すこと勿れ、

讀方　德を謹しむは須く至微の事に謹むべし。恩を施すには務めて報ぜざるの人に施せ。

交市人不如友山翁。謁朱門不如親白屋。聽街談巷語不如聞樵歌牧詠。談今人失德過擧。不如述古人嘉言懿行。

◎鄙俗を避け清淡に居らざるべからず、
△朱門、權勢ある人の家、
△白屋、質素な家をいふ、高士潔士の居る所なり、
△懿德、美德をいふ、

讀方　市人に交るは山翁を友とするに如かず。朱門に謁するは白屋に親しむに如かず。街談巷語を聽くは樵歌牧

詠を聞くに如かず。今人の失德過舉を談ずるは、古人の嘉言懿德を述ぶるに如かず。

德者事業之基。未有基不固而棟宇堅久者。

◎德全からざれば事業永久に榮えず、

讀方　德は事業の基なり。未だ基固からずして、棟宇の堅久なるものあらず。

心者後裔之根。未有根不植而枝葉榮茂者。

◎子孫の盛大を願はゞ先づ自ら精神の修養をなすべし、

讀方　心は後裔の根なり。未だ根植ゑずして、枝葉の榮茂なる者あらず。

△後裔、子孫なり、

前人云。拋却自家無盡藏。沿門持鉢效貧兒。又云。暴富貧兒休說夢。誰家竈裡火無烟。一箴自味所有。可爲學問切戒。

◎誰家竈裡火無烟、何處にも日は照ると云ふ意なり、

讀方　前人云ふ、自家の無盡藏を拋却して、門に沿ひ鉢を持して貧兒に效ふと。又云ふ、暴富の貧兒夢を說くことを休めよ。誰が家の竈裡の火か煙無からんと。一は自ら所有に暗きことを箴め、一は自ら所有に誇ることを箴む。學問の切戒と爲す可し。

道是一重公衆物事。當隨人而接引。學是

◎道德と學問とは君

子と聖人とのみの專有物にあらず、

◎人は凡て己を以て他人を圖る、

△煦育、溫め育つる

一個尋常家飯。當隨事而警惕。

讀方　道は是れ一重の公衆の物事なり、當に人に隨つて接引すべし。學は是れ一個の尋常家飯なり、當に事に隨つて警惕すべし。

信人者。人未必盡誠。己則獨誠矣。疑人者。人未必皆詐。己則先詐矣。

讀方　人を信ずる者は、人未だ必ずしも盡く誠ならず己れ則ち獨誠なり。人を疑ふ者は、人未だ必ずしも皆詐らず、己則ち先づ詐る。

念頭寬厚的如春風煦育。萬物遭之而生。

を云ふ、

△朔雪、冬の雪、事物を凍殺するものなり、

◎寬厚の心は萬物を發育せしめ、忌刻の心は萬物を殺す、

◎善事は不知の間に榮え、惡事は春雪の如く消ゆ、

△隱微、隱れて人の

念頭忌刻的如朔雪陰凝。萬物遭之而死。

讀方　念頭寬厚的は春風の煦育の如し、萬物之に遭ふて生ず。念頭忌刻的は朔雪の陰凝の如し、萬物之に遭ふて死す。

爲善不見其益。如草裡東瓜。自應暗長。爲惡不見其損。如庭前春雪。當必潛消。

讀方　善を爲して其の益を見ず、草裡の東瓜の如し。自ら應に暗に長ずべし。惡を爲して其損を見ず、庭前の春雪の如し。當に必ず潛に消すべし。

遇故舊之交。意氣要愈新。處隱微之事。心

見ざるを言ふ、

◎君友を疎せず、陰徳を守り、衰朽の人を厚遇すべし、

◎勤儉は君子の美徳なり、小人之を亂用して私利を營み、私慾を充たす、

迹宜愈顯。待衰朽之人。恩禮當愈隆。

讀方　故舊の交に遇はゞ、意氣愈々新なるを要す。隱微の事に處しては心迹宜しく愈々顯なるべし。衰朽の人に待するは恩禮當に愈々隆なるべし。

勤者敏於德義。而世人借勤以濟其貧。儉者淡於貨利。而世人假儉以飾其吝。君子持身之符。反爲小人營私之具矣。惜哉。

讀方　勤なる者は德義に敏し、而して世人は勤を借つて以て其貧を濟ふ。儉なる者は貨利に淡し、而して世人は儉を假つて以て其の吝を飾る。君子身を持するの符、反つて小人私を營むの具と爲る、惜いかな。

◎一時の意興と情識によつて事をなすは未だ達識の士と云ふこと能はず、

△意興、とは一時の意志感興をいふ、

憑意興作爲者。隨作則隨止。豈是不退之輪。從情識解悟者。有悟則有迷。終非常明之燈。

讀方　意興に憑つて作爲する者は、隨つて作せば則ち隨つて止む。豈に是れ不退の輪ならんや。情識に從つて解悟する者は悟ることあれば迷ふことあり。終に常明の燈に非ず。

◎人に對しては寛にして自ら持すること嚴なるべし、

人之過誤宜恕。而在己則不可恕。己之困辱當忍。而在人則不可忍。

◎清、俗、奇、異の差別を説く、
△作意、故意なり、

讀方 人の過誤は宜しく恕すべし、而して己れにあつて則ち恕すべからず。己れの困辱は當に忍ぶべし、而して人にあつては則ち忍ぶべからず。

能脫俗便是奇。作意尙奇者。不爲奇而爲異。不合汚便是清。絕俗求清者。不爲清而爲激。

讀方 能く俗を脫すれば、便ち是れ奇なり。作意に奇を尙ぶ者は、奇と爲さずして異と爲す。汚に合せざれば便ち是れ清なり。俗を絕つて清を求むる者は、清と爲さずして激と爲す。

△恩威も其道を以てせざれば人を服すること能はず、
▲性とは天然の本性を云ふ、
◎心虛ならざれば性を見ること能はず、

恩宜自淡而濃。先濃後淡者。人忘其惠。威宜自嚴而寬。先寬後嚴者。人怨其酷。

讀方 恩は宜しく淡よりして濃なるべし。濃を先にし淡を後にする者は人其惠を忘る。威は宜しく嚴よりして寬なるべし。寬を先にして嚴を後にする者は人其酷を怨む。

心虛則性現。不息心而求見性。如撥波覓月。意淨則心淸。不了意而求明心。如索鏡增塵。

讀方 心虛なれば則ち性現す。心を息めずして性を見んことを求めば、波を撥いて月を覓むるが如し。意淨ければ

◎世人の毀譽褒貶大抵斯の如し、毫も意に介するに足らず、

△戴冠大帶、大なる冠と帶にて高位高官を云ふ、

則ち心清し、意を了せずして心を明にせんことを求むるは、鏡を索めて塵を增すが如し。

我貴而人奉之。奉此戴冠大帶也。我賤而人侮之。侮此布衣草履也。然則原非奉我。我胡爲喜。原非侮我。我胡爲怒。

讀方　我れ貴くして人之れを奉ずるは、此の戴冠大帶を奉ずるなり。我れ賤しくして人之れを侮るは、此の布衣草履を侮るなり。然らば則ち原我を奉ずるに非ず、我れ胡ぞ喜びを爲さん。原我れを侮るに非ず、我れ胡ぞ怒を爲さん。

◎慈悲の念も此處に至らざれば徒に外觀を飾るに止まる、

◎心體若し天體と一體となるを得ば眞に修養の極致なり、

爲鼠常留餂。憐蛾不點燈。古人此等念頭是吾人一點生生之機。無此便所謂土木形骸而已。

讀方　鼠の爲めに常に餂を留め、蛾を憐れんで燈を點せず。古人此等の念頭、是れ吾人一點生生の機なり。此れ無ければ便ち謂はゆる土木の形骸のみ。

心體便是天體。一念之喜。景星慶雲。一念之怒。震雷暴雨。一念之慈。和風甘露。一念之嚴。烈日秋霜。何者少得。只要隨起隨滅

廓然無碍。便與太虛同體。

讀方 心體は便ち是れ天體なり。一念の喜は景星慶雲、一念の怒は震雷暴雨、一念の慈は和氣甘露、一念の嚴は烈日秋霜、何者か少き得ん。只隨つて起り隨つて滅し、廓然として碍り無きを要せば、便ち大虛と體を同うせん。

無事時。心易昏冥。宜寂寂而照。以惺惺。有事時。心易奔逸。宜惺惺而主以寂寂。

讀方 事無き時は心昏冥なり易し。宜しく寂々にして照らすに惺々を以つてすべし。事ある時は心奔逸し易し。宜しく惺々にして主とするに、寂々を以てすべし。

◎無事の時心神を昏冥ならしめず、有事の時心神を奔逸ならしめざること肝要なり、

△惺々、心機活潑なるを云ふ、

し。

議事者。身在事外。宜悉利害之情。任事者。身居事中。當忘利害之慮。

讀方 事を議する者は、身事の外に在つて、宜しく利害の情を悉すべし。事に任ずる者は、身事の中に居て、當に利害の慮を忘るべし。

士君子處權門要路。操履要嚴明。心氣要和易。毋少隨而近腥羶之黨。亦毋過激而犯蜂蠆之毒。

讀方 士君子權門要路に處れば、操履は嚴明なるを要し、

◎事を議し、事に當るものゝ腹臆すべき言なり、

△操履、行動を言ふ

△腥、は魚類の臭氣

△羶、は獸肉の臭氣

◎士君子權門要路に居る時の心得を示す、

心氣は和易なるを要す。少しく隨うて腥羶の黨に近く毋れ、亦過激にして蜂蠆の毒を犯す毋れ。

◎莊子の所謂、才不才の間に居らんと欲するものゝ如し、

標節義者。必以節義受謗。榜道學者。常因道學招尤。故君子不近惡事。亦不立善名。只渾然和氣。纔是居身之珍。

◎他人を敎化薫育す

讀方　節義を標する者は、必ず節義を以て謗を受け、道學を榜する者は、常に道學に因つて尤を招く。故に君子は惡事に近かず、また善名を立てず、只渾然たる和氣、纔に是れ身を居くの珍なり。

遇欺詐的人。以誠心感動之。遇暴戾的人。

ろには人の性情機根に對して自己の態度を異にするの必要あり、

△慈祥、は慈悲の心なり、

△兩間は天地のこと、

△醞釀、作り出す、

△寸心は一心と云ふが如し、

以和氣薫蒸之。遇傾邪私曲的人。以名義氣節激礪之。天下無不入我陶冶中矣。

讀方　欺詐的の人に遇はゞ、誠心を以つて之を感動し、暴戾的の人に遇はゞ、和氣を以て之を薫蒸し、傾邪私曲的の人に遇はゞ名義氣節を以つて之を激礪す。天下我が陶冶の中に入らざる無し。

一念慈祥。可以醞釀兩間和氣。寸心潔白。可以昭垂百代清芬。

讀方　一念の慈祥以て兩間の和氣を醞釀すべし。寸心の潔白以て百代の清芬を昭垂すべし。

△百代清芬、百代の後まで傳はる芳しき名なり、
◎除謀怪習異行奇能は身を過るものにして、庸德庸行よく其身を完うす、
△側路、險阻なる路、
△傾險之人、邪惡な人を云ふ、
△坎坷、困難なる境
△榛莽坑塹、種々困難なる境遇を云ふ、

陰謀怪習。異行奇能。俱是涉世的禍胎。只一個庸德庸行。便可以完混沌而召和平。

讀方 陰謀怪習、異行奇能は俱に是れ世を涉る的の禍胎なり。只一個の庸德庸行、便ち以つて混沌を完うして和平を召くべし。

語云。登山耐側路。踏雪耐危橋。一耐字極有意味。如傾險之人情坎坷之世道。若不得一耐字撑持過去。幾何不墮入榛莽坑塹哉。

◎功業と文章とは人を大にする所以のものにあらず、
△瑩然、輝く貌、

讀方 語に云く山に登つて側路に耐へ、雪を踏んで危橋に耐ふと。一の耐の字極めて意味あり。傾險の人情、坎坷の世道の如き、若し一の耐の字を得て撑持し過ぎ去らずんば、幾何ぞ榛莽坑塹に墮入せざらんや。

誇逞功業。炫耀文章。皆是靠外物做人。不知。心體瑩然。本來不失。卽無寸功隻字。亦自有堂堂正正做人處。

讀方 功業に誇逞し、文章に炫耀するは皆是れ外物に靠つて人と做るなり。知らず、心體瑩然、本來失はずんば即ち寸功隻字無きも、亦自ら堂々正々人と做る處あるを。

忙裡要偷閒。須先向閒時討個欄柄。鬧中要取靜。須先從靜處立個主宰。不然未有不因境而遷隨事而靡者。

◎鬧中に靜を求めんと欲せば、平時精神の堅忍不拔を計らざるべからず、

△欄柄、刀の柄を云ふ、

△主宰、萬物を支配するもの即ち自己の精神を云ふ、

讀方 忙裡に閒を偸まんと要せば須く先づ閒時に向つて個の欄柄を討ぬべし。鬧中に靜を取らんと要せば、須らく先づ靜處從り個の主宰に立つべし。然らざれば未だ境に因つて遷り、事に隨つて遷り、事に隨つて靡かざる者あらず。

不昧己心。不盡人情。不竭物力。三者可以爲天地立心。爲生民立命。爲子孫造福。

◎己れの心を昧ましず、人の情を盡さず、物の力を竭さず、三つの者は以つて天地の爲めに心を立て、生民の爲めに命を立て子孫の爲めに福を造すべし。

◎己れの心を昧ましず、

◎人の情を盡さず、

◎物の力を竭さず、

二、自己のため他人に堪えざる苦痛をなさしめず、三、自己の慾を充さん爲め、物の力を竭くさず、

居官有二語。曰惟公則生明。惟廉則生威。居家有二語。曰惟恕則情平。惟儉則用足。

◎官にあつては公と廉とを守り。家にあつては恕と儉とを忘るべからず、

讀方 官に居るに二語あり。曰く惟公なれば則ち明を生じ、惟廉なれば則ち威を生ず。家に居るに二語あり。曰く惟恕なれば則ち情平かに、惟儉なれば則ち用足る。

處富貴之地。要知貧賤的痛癢。當少壯之時。須念衰老的辛酸。

◎富貴に處して貧賤を忘れず、壯時に於いて老後の事を慮るべし、

△痛癢、苦痛をいふ、

◎世に處するには清濁併せ飲むの寛容あるを要す、

△茹納、受け容るゝこと、

△皎潔、皎々潔白なること、

△汚辱垢穢、不徳不義の行爲を云ふ、

△對頭、相手を定め

讀方 富貴の地に處しては、貧賤的の痛癢を知らんことを要す。少壯の時に當つては須く衰老的の辛酸を念ふべし。

持身不可太皎潔。一切汚辱垢穢要茹納得。與人不可太分明。一切善惡賢愚要包容得。

讀方 身を持するは太だ皎潔なるべからず。一切の汚辱垢穢は、茹納せんことを要す。人に與みするは太だ分明なるべからず、一切の善惡賢愚は包容し得んことを要す。

休與小人仇讐。小人自有對頭。休向君子詔媚。君子原無私惠。

讀方 小人と仇讐するを休めよ、小人自ら對頭あり。君子に向つて諂媚するを休めよ、君子原と私惠なし。

縱欲之病可醫。而執理之病難醫。事物之障可除。而義理之障難除。

讀方 縱欲の病は醫す可し、而して執理の病は醫し難し。事物の障は除く べし、而して義理の障は除き難し。

磨礪當如百煉之金。急就者非遂養。施爲宜似千鈞之弩。輕發者無宏功。

讀方 磨礪は當に百煉の金の如くなるべし、急就の者は

△私惠、私意によつて與ふる恩惠、君子は諂媚するの故を以て私惠を欲するが如きことなし、

△縱欲之病、情欲の動くまゝに酒色に耽溺する病、

△執理之病、自己の偏見に執着して人の說を容れざる病、

△磨礪、人心を鍛錬すること、

△急就者、急速に成就せし者、

△遂養、深き修養を

て害を加へる、

遂養に非らず。施爲は宜しく千鈞の弩に似るべし、輕發の者は宏功無し。

寧爲小人所忌毀。毋爲小人所媚悅。寧爲君子所責脩。毋爲君子所包容。

讀方　寧ろ小人に忌毀せらるゝも、小人に媚悅せらるゝこと毋れ。寧ろ君子に責修せらるゝも、君子に包容せらるゝこと毋れ。

好利者逸出於道義之外。其害顯而淺。好名者竄入於道義之中。其害隱而深。

讀方　利を好む者は道義の外に逸出す。其害顯れて淺し。名を好む者は道義の中に竄入す。其の害隱れて深し。

云ふ、

△施爲、世間のことを實行處理するを云ふ、

◎小人の忌毀と君子の責修とは甘んじて受くべし、

△忌毀、忌み疎ぜらるゝを云ふ、

△責修、嚴しく譴責さるゝを云ふ、

△包含、は寬容なり、

◎名を好む者の害は利を好むもの〻害よりも深し、

受人之恩雖深不報。怨則淺亦報之。聞人之惡雖隱不疑。善則顯亦疑之。此刻之極薄之尤也。宜切戒之。

讀方　人の恩を受けては深しと雖も報ぜず、怨みは淺きも亦之を報ず。人の惡を聞いては隱れたりと雖ども疑はず。善は則ち顯はるも亦之を疑ふ。此れ刻の極、薄の尤たり。宜しく切に之を戒むべし。

讒夫毀士如寸雲蔽日。不久自明。媚子阿人似隙風侵肌。不覺其損。

◎忘恩猜疑の念は切に戒むべし、

△讒夫毀士、人を讒し人を毀る人をいふ、

△媚子阿人、人に媚び人に阿る人を云ふ、
△隙風、戸の間隙を通して入り來る風を云ふ、
◎高峻なる山に木なし、清水に魚鼈住まず、
△褊急之衷、偏狹にして窮屈なる心、

讀方 讒夫毀士は寸雲の日を蔽ふが如し。久しからずして自ら明なり。媚子阿人は隙風の肌を侵すに似たり、其損を覺えず。

山之高峻處無木。而谿谷廻環則草木叢生。水之湍急處無魚。而淵潭停蓄則魚鱉聚集。此高絶之行褊急之衷。君子重有戒焉。

讀方 山の高峻なる處には木無し、而して谿谷廻環すれば即ち草木叢生す。水の湍急なる處には魚無し、而して淵潭停蓄すれば則ち魚鼈聚集す。此の高絶の行、褊急の衷は君子重く戒むるあり。

建功立業者。多虛圓之士。僨事失機者。必執拗之人。

讀方 功を建て業を立つる者は多くは虛圓の士なり。事を僨り機を失ふ者は必ず執拗の人なり。

處世不宜與俗同。亦不宜與俗異。作事不宜令人厭。亦不宜令人喜。

讀方 世に處しては宜しく俗と同うすべからず、亦宜しく俗と異るべからず、事を作すには宜しく人をして厭はしむべからず、亦宜しく人をして喜ばしむべからず。

△虛圓之士、虛心にして事物に拘泥せざる圓活自在の士、
△執拗之人、事物に固執する頑强の人を云ふ、
◎俗に離れず、而かも俗に溺れざるを尚ぶ、

◎日暮の烟霞、歳晩の芳馨は皆な天地自然の眞機なり、故に君子にして晩年に至り龍頭蛇尾に終るは未だ眞機を得ざるものなり、

◎俗に能ある鷹は爪を隠すとは此の章を戯明す、

△肩鴻任鉅、鴻は大なり、鉅は巨なり、鴻業大事を双肩に擔つて立つをいふ、

日既暮而猶烟霞絢爛。歳將晩而更橙橘芳馨。故末路晩年君子更宜精神百倍。

讀方 日既に暮れて猶ほ烟霞絢爛たり。歳將に晩れんとして更に橙橘芳馨たり。故に末路晩年は君子更に宜しく精神百倍なるべし。

鷹立如睡。虎行似病。正是他攫人噬人手段處。故君子要聰明不露才華不逞。纔有肩鴻任鉅的力量。

讀方 鷹立ちて睡るが如く、虎行くこと病むに似たり。正に是れ他の人を攫み人を噬ふ手段の處なり。故に君子は聰明露さず。才華逞うせざることを要す、纔に肩鴻任鉅的の力量あり。

◎儉讓は美德なり、されど儉は慳吝に陷り、讓は曲諂に走るの恐あり、

△足恭、曲謹は共に恭に過ぎ、謹に過ぐるを云ふ、

△出機心、故意に出つ、

△抝意、自分の意に抝(もと)るを云ふ、

儉美德也。過則爲慳吝。爲鄙嗇。反傷雅道。讓懿行也。過則爲足恭爲曲謹。多出機心。

讀方 儉は美德なり。過ぐれば則ち慳吝となり、鄙嗇と爲り、反つて雅道を傷る。讓は懿行なり、過ぐれば則ち足恭と爲り、曲諂と爲る。多くは機心より出づ。

毋憂抝意。毋喜快心。毋恃久安。毋憚初難。

讀方 抝意を憂ふること毋れ。快心を喜ぶこと毋れ。久安を恃むこと毋れ。初難を憚ること毋れ。

△好人家、善い家庭といふ意なり、
△聲華。音曲及び衣服の華美を云ふ、
△好士子、人格高き紳士、
△好臣士。君主に對して忠實なる臣、

飲宴之樂多不是個好人家。聲華之習勝不是個好士子。名位之念重不是個好臣士。

◎庸人は樂を求めて苦み、達士は苦心の爲に樂を換ふ、

讀方　飲宴の樂み多きは是れ個の好人家ならず。聲華の習ひ勝つは、是れ個の好士子ならず。名位の念重きは、是れ個の好臣士ならず。

世人以心肯處爲樂。却被樂心引在苦處。達士以心拂處爲樂。終爲苦心換得樂來。

讀方　世人は心の肯ふ處を以つて樂となす。却つて樂心に引れて苦處にあり。達士は心の拂る處を以つて樂となす。終に苦心の爲に樂を換へ得來る。

居盈滿者如水之將溢未溢。切忌再加一滴。處危急者如木之將折未折。切忌再加一搦。

◎盈滿に居るものは危急の所に處るが如く春氷を踏むが如し、
△搦、は撓なり、

讀方　盈滿に居る者は水の將に溢れんとして未だ溢れざるが如し。切に再び一滴を加ふるを忌む。危急に處する者は木の將に折れんとして未だ折れざるが如し。切に再び一搦を加ふるを忌む。

冷眼觀人。冷耳聽語。冷情當感。冷心思理。

◎冷靜ならざれば事

物の正鵠を得難し、

△寛舒、心神の寛大なるを云ふ、

△迫促、小事に齷齪するをいふ、

△澤、は德澤なり、

◎輕しく人を推測することは自らを危うする所以なり、

讀方　冷眼にて人を觀、冷耳にて語を聽き、冷情にて感に當り、冷心にて理を思ふ。

仁人心地寛舒。便福厚而慶長。事事成個寛舒氣象。鄙夫念頭迫促。便祿薄而澤短。事事得個迫促規模。

讀方　仁人は心地寛舒なり。便ち福厚くして慶長く、事々個の寛舒の氣象を成す。鄙夫は念頭迫促なり。便ち祿薄くして澤短く、事々個の迫促の規模を得。

聞惡不可就惡。恐爲讒夫洩怒。聞善不可急親。恐引奸人進身。

△性燥心粗、精神の靜平にして緻密ならざるを云ふ、

◎人を用ゐるに冷酷なるべからず。友に交はるにはよく人を選ばざれば惡友集る、

讀方　惡を聞いては就ち惡むべからず。恐らくは讒夫の怒を洩すことを爲さん。善を聞いては急に親むべからず。恐らくは奸人の身を進むることを引かん。

性燥心粗者一事無成。心和氣平者百福自集。

讀方　性燥心粗なる者は一事も成ること無し、心和し氣平かなる者は百福自ら集る。

用人不宜刻。刻則思効者去。交友不宜濫。濫則貢諛者來。

讀方　人を用ふるには宜しく刻なるべからず。刻なれば

則ち効を思ふ者去る。友に交はるには宜しく濫なるべからず。濫なれば則ち諛を貢する者來る。

風斜雨急處。要立得脚定。花濃柳艷處。要回得頭早。

着得眼高。路危徑險處。要回得頭早。

◎平時に於て心を用ゐざれば危機に際して應急の處置をなすこと能はず、

讀方 風斜に雨急なる處は、脚を立ち得て定めんことを要す。花濃に柳艷なる處は眼を着け得て高からんことを要す。路危く徑險なる處は頭を回らし得て早からんことを要す。

節義之人濟以和衷。纔不啓忿爭之路。功名之士承以謙德。方不開嫉妬之門。

◎節義の士は和衷の念を忘れず、功名の士は謙德を守らば功名節義を完うすることを得、

△和衷。溫和なる心、

△牽牘、手紙のこと、

△倖端、人に僥倖の念を起さしむる端緒、

△崖岸、威儀禮節を守るをいふ、

△舊好、舊い知人、

讀方 節義の人は濟ふに和衷を以つてせば、纔に忿爭の路を啓かず。功名の士は承くるに謙德を以つてせば、方に嫉妬の門を開かず。

士大夫居官不可牽牘無節。要使人難見以杜倖端。居鄉不可崖岸太高。要使人易見以敦舊好。

讀方 士大夫官に居ては牽牘節無るべからず。人をして見難からしめ。以つて倖端を杜がんことを要す。鄉に居ては崖岸太だ高かるべからず。人をして見易からしめ、以つて舊好を敦くせんことを要す。

◎大人を畏るれば放逸の心止み、小人を畏るれば豪横に陷らず、

◎逆境にあつては自己以下の人を思ひ、心神怠荒せし時は自己以上の人を見て心神を興起すべし、

△拂逆、自己の意志に反對することをいふ、

△怠荒、怠惰粗暴となることをいふ、

大人不可不畏。畏大人則無放逸之心。小民亦不可不畏。畏小民則無豪横之名。

讀方 大人は畏れざるべからず。大人を畏るれば則ち放逸の心無し。小民も亦畏れざるべからず。小民を畏るれば則ち豪横の名なし。

事稍拂逆。便思不如我的人。則怨尤自消。心稍怠荒。便思勝似我的人。則精神自奮。

讀方 事稍々拂逆せば便ち我に如かざる的の人を思へば、則ち怨尤自ら消ゆ。心稍怠荒せば便ち我れ似り勝る的の人を思へば、則ち精神自ら奮ふ。

◎感情の興奮せし際に事をなさず、萬事冷靜に思考して後なすべし、

◎書を讀むに際し作者の眞意を理解し、文章字句の穿鑿に陷らざるを要す、

△筌蹄、筌は魚を釣る浮木、蹄は兎を捕る罠なり、

△迹象、表面にあらはれたる形相なり、

不可乘喜而輕諾。不可因醉而生嗔。不可乘快而多事。不可因倦而鮮終。

讀方 喜に乘じて諾を輕々しくす可からず、醉に因りて嗔を生ず可からず。快に乘じて事を多くすべからず。倦に因りて終を鮮うすべからず。

善讀書者要讀到手舞足蹈處。方不落筌蹄。善觀物者要觀到心融神洽時。方不泥迹象。

讀方 善く書を讀む者は手舞ひ足蹈むの處に讀み到らんことを要す。方に筌蹄に落ちず。善く物を觀る者は心融

け神洽くるの時に觀到らんことを要す。方に迹象に泥まず。

天賢一人以誨衆人之愚。而世反逞所長以形人之短。天富一人以濟衆人之困。而世反挾所有。以凌人之貧。眞天之戮民哉。

讀方　天一人を賢にして以つて衆人の愚を誨ふ。而して世反つて長ずる所を逞うして以て人の短を形はす。天一人を富ましめ以つて衆人の困を濟ふ。而して世反つて有する所を挾んで、以つて人の貧を凌ぐ。眞に天の戮民なるかな。

◎賢者にして衆愚を啓かず、富者にして貧者を濟はざるは天の意志に悖る、

△戮民は惡民なり、

至人何思何慮。愚人不識不知。可與論學。亦可與建功。唯中才的人多一番思慮知識。便多一番億度猜疑。事事難與下手。

讀方　至人は何思何慮なり。愚人は不識不知なり。共に學を論ず可く。亦與に功を建つ可し。唯だ中才的の人は一番の思慮知識多ければ、便ち一番の億度猜疑多し、事々與に手を下し難し。

口乃心之門。守口不密洩盡眞機。意乃心之足。防意不嚴走盡邪蹊。

讀方　口は乃ち心の門なり。口を守ること密ならざれば

◎半可通の士は共に事をなし難し、

△何思何慮、何事も思はず何事も慮らず、心中靜平なり、

△至人、智德共に圓滿の人なり、

△中才的人、小才子ないふ、

△億度、他人の心意を忖度すること、

◎口、意、嚴に謹まざれば禍を招く、

◎人の過を責むるには將來の無過を諭し、己は過なき時に過なからんことを思ふべし、

眞機を洩し盡くす。意は乃ち心の足なり。意を防ぐこと嚴ならざれば邪蹊を走り盡くす。

責人者。原無過於有過之中。則情平。責己者。求有過於無過之內。則德進。

讀方　人を責むる者は、無過を有過の中に原せば則ち情平なり。己を責むる者は、有過を無過の內に求むれば則ち德進む。

◎青年子弟の敎化蕭陶は忽にすべからず、

△胚胎、卵なり、

△令器、有用の材を云ふ、

子弟者大人之胚胎。秀才者士夫之胚胎。此時若火力不到。陶鑄不純。他日涉世立朝。終難成個令器。

讀方　子弟は大人の胚胎なり。秀才は士夫の胚胎なり。此の時若し火力到らず、陶鑄純ならざれは、他日世を涉り朝に立つに、終に個の令器を成し難し。

△惕慮、恐れ慮ること、

△惸獨、頼少き孤獨者をいふ、

君子處患難而不憂。當宴遊而惕慮。遇權豪而不懼。對惸獨而驚心。

讀方　君子は患難に處して憂ひず。宴遊に當つて惕慮す。權豪に遇ひて懼れず。惸獨に對して心を驚かす。

◎濃天は淡久に如かず、早秀は晩成に如かず、

桃李雖艷。何如松蒼栢翠之堅貞。梨杏雖甘。何如橙黃橘綠之馨洌。信乎。濃天不及淡久。早秀不如晩成也。

讀方　桃李は艶なりと雖も、何ぞ松蒼柏翠の堅貞なるに如かん。梨杏は甘しと雖も何ぞ橙黄橘綠の馨冽なるに如かん。信なるかな、濃天は淡久に及ばず。早秀は晩成に如かざるは。

風怡浪靜中。見人生之眞境。味淡聲希處。識心體之本然。

讀方　風怡に浪靜かなる中、人生の眞境を見る。味淡く聲希なる處、心體の本然を識る。

訓註　ポケット菜根譚前篇終

ポケット菜根譚　後篇

還初道人洪自誠著
臨風笹川種郎校閲
五橋勝屋英造訓註

談山林之樂者。未必眞得山林之趣。厭名利之談者。未必盡忘名利之情。

◎人は徒に自己を高く見せんとする弱點あり、言意相反することあり、

讀方　山林の樂を談ずるものは、未だ必ずしも眞に山林の趣を得ず。名利の談を厭ふ者は、未だ必ずしも盡く名利の情を忘れず。

訓註

釣水逸事也。尚持生殺之柄。奕棋清戯也。且動戰爭之心。可見喜事不如省事之爲適。多能不若無能之全眞。

讀方 水に釣るは逸事なり。尚ほ生殺の柄を持す。奕棋は清戯なり。且つ戰爭の心を動かす。見るべし、事を喜むは事を省くの適たるに如かず。多能は無能の眞たるに若かざることを。

鶯花茂而山濃谷艶。總是乾坤之幻境。水木落而石瘦崖枯。纔見天地之眞吾。

讀方 鶯花茂くして山濃に谷艶なる、總て是れ乾坤の幻境なり。水木落ちて石瘦せ崖枯る。纔に天地の眞吾を見る。

△眞吾、は眞の精神といふ意なり、

△水木落而云々、朱子の詩の「水落水盡千崖枯、適然我亦見眞吾、」と同意なり、

△眞吾、は眞體なり、

歲月本長而忙者自促。天地本寬而鄙者自隘。風花雪月本閒而勞攘者自冗。

讀方 歲月本長くして忙しき者自ら促る。天地本寬くして鄙しき者自ら隘し。風花雪月本閒にして勞攘の者自ら冗なり。

得趣不在多。盆池拳石間煙霞具足。會景不在遠。蓬窓竹屋下風月自賒。

讀方 趣を得るは多きに在らず。盆池拳石の間に烟霞

△勞攘之者、齷齪する人を云ふ、

△間、は悠々の意なり、

◎趣味上の樂は事物の多少にあらず、景色を樂しみ眺むるは距離の遠近にあらず、

具足す。景を會するは遠きにあらず。蓬窓竹屋の下に、風月自から賒なり。

聽靜夜之鐘聲。喚醒夢中之夢。觀澄潭之月影。窺見身外之身。

◎靜夜の鐘聲、澄潭の月影共に自己を反省せしむ、

讀方　靜夜の鐘聲を聽いて夢中の夢を喚び醒す。澄潭の月影を見て身外の身を窺ひ見る。

鳥語虫聲總是傳心之訣。花英草色無非見道之文。學者要天機清徹胸次玲瓏觸物皆有會心處。

△傳心、佛語の以心傳心の意なり、

◎宇宙の萬物盡く見性會心の動機とならざるものなし、

讀方　鳥語虫聲總て是れ傳心の訣なり。花英草色も見道の文に非るは無し。學者天機清徹、胸次玲瓏にして物に觸れて皆會心の處あらんことを要す。

人解讀有字書。不解讀無字書。知彈有絃琴。不知彈無絃琴。以迹用。不以神用。何以得琴書之趣。

讀方　人有字の書を讀むことを解して、無字の書を讀むことを解せず。有絃の琴を彈ずるを知つて、無絃の琴を彈ずることを知らず。迹を以て用ひ、神を以つて用ひず、何を以つてか琴書の趣を得ん。

心無物欲。卽是秋空霽海。坐有琴書便成

△秋空霽海、秋空の

◎外形に囚はれて精神を見る明なきを責む、

快晴にして海の如く、心氣の清々たるをいふ、

△石室丹丘、神佛の居る場處。

△漏、は漏刻にして水時計を云ふ、

△茗、は茶のことなり、

△索然、乾燥無味を云ふ、

◎歡樂極つて哀情起る、人世の萬事皆此一語に漏れず。達識の士は先づ之を知るべし、

石室丹丘。

讀方 心物欲なければ即ち是れ秋空霽海、坐に琴書あれば便ち石室丹丘を成す。

賓朋雲集。劇飲淋漓樂矣。俄而漏盡燭殘香銷茗冷。不覺反成嘔咽。令人索然無味。天下事率類此。人奈何不早回頭也。

讀方 賓朋雲の如く集り、劇飲淋漓として樂めり。俄にして漏盡き濁殘り、香銷え、茗冷かにして、覺えず反つて嘔咽を成し、人をして索然として味無からしむ。天下の事率ね此に類す。人奈何ぞ早く頭を回らさざるや。

△五湖、支那の五大湖、饒州の鄱陽湖、岳州の青草湖、潤州の洞庭湖、蘇州の大湖を云ふ、

△寸裡、は心裡なり、

◎眼前の機を悟らば千古の英雄を談笑するを得、

△微塵、とは佛語なり、佛說に現在の世界は破壞して微塵となる時期來るを說く、

△塵中の塵、とは微塵となるべき天地間に存在する萬物をいふ、

△影中之影、人間に

會得個中趣。五湖之煙月盡入寸裡。破得眼前機。千古之英雄盡歸掌握。

讀方 個中の趣を會得すれば五湖の烟月、盡く寸裡に入る。眼前の機を破得すれば千古の英雄盡く掌握に歸す。

山河大地已屬微塵。而況塵中之塵。血肉身軀且歸泡影。而況影外之影。非上上智無了了心。

讀方 山河大地已に微塵に屬す、而るを況んや塵中の塵をや。血肉身軀且つ泡影に歸す、而るを況んや影中の影

附屬する名譽富貧の如きものを云ふ、
△石火光中、は天地の長きに比し、人生の短きことを石火光中と云ふ、
△蝸牛角上、莊子に「蝸角の左に國あり蠻氏と謂ひ角の右に國あり觸氏と謂ふ、此の二國地を爭うて大戰をなす」とあり、
◎淡泊貧素も極端に走れば却つて沒趣味に陷る、
△頑空、空は佛者の戒く所なりされど空に固執するは圓轉自在の法門を會得するをや。上々の智にあらざれば了々の心なし。

石火光中爭長競短。幾何光陰。蝸牛角上較雌論雄。許大世界。

讀方　石火光中に長を爭ひ短を競ふ。幾何の光陰ぞ。蝸牛角上に雌を較べ雄を論ず。許く大さの世界ぞ。

寒燈無焰。敝裘無溫。總是播弄光景。身如稿木。心似死灰。不免墮落頑空。

讀方　寒燈焰なく敝裘溫なきは、總て是れ光景を播弄す。身稿木の如く心死灰に似たるは、頑空に墮在するを免れず。

ものにあらず、
△當下、は其時と云ふ意なり、
◎心靈悟道の工夫をなすに時機の到來を待つは愚なり、若し心靈修養の必要を知らば直に萬事を放棄して其道に進まざれば人生の一大事を悟了すると覺束なし、

人肯當下休。便當下了。若要尋個歇處。則婚嫁雖完。事亦不少。僧道雖好。心亦不了。前人云。如今休去。便休去。若覓了時。無了時。見之卓矣。

讀方　人肯て當下に休せば便ち當下に了せん。若し個の歇む處を尋ねんと要せば、即ち婚嫁完しと雖も事亦少なからず。僧道好しと雖も心亦了せず。前人云ふ如今休し去らば便ち休し去れ。若し了時を覓むれば了時なからんと。之を見ること卓なり。

從冷觀熱。然後知熱處之奔馳無益。從冗

◎實際局に當る間は

利害を明視すること能はず、
△冷は冷靜なり、熱は熱中なり、
△盲泉石、泉石や畑殿を愛して之を離るゝこと能はざるを云ふ、
◎眞の解脫を說き悟道の至極を示す、
△競逐、は競爭驅逐をいふ、

入閒。然後覺閒中之滋味最長。

讀方　冷從り熱を視、然る後に熱處の奔馳益なきを知る。冗從り閒に入り、然る後に閒中の滋味最も長きを覺ゆ。

有浮雲富貴之風。而不必岩棲穴處。無膏盲泉石之癖。而常自醉酒耽詩。

讀方　富貴を浮雲にするの風あつて、必ずしも岩棲穴處せず。泉石に膏盲するの癖なくして、常に自ら酒に醉ひ詩に耽る。

競逐聽人而不嫌盡醉。恬淡適己而不誇獨醒。此釋氏所謂不爲法纏。不爲空纏。身心兩自在者。

讀方　競逐人に聽して盡醉を嫌はず。恬淡己に適して獨醒に誇らず。此れ釋氏の謂はゆる法の爲めに纏せられず、空の爲に纏せられず、身心兩ながら自在なる者なり。

延促由於一念。寬窄係之寸心。故機閒者。一日遙於千古。意廣者。斗室寬若兩閒。

讀方　延促は一念に由り、寬窄は之を寸心に係く。故に機閒なるものは一日も千古より遙なり。意廣き者は斗室も寬きこと兩閒の若し。

損之又損。栽花種竹。儘交還鳥有先生。忘

△盡醉、世人盡く醉ふを言ふ、
△延促、は長短、寬窄は廣狹なり、
△寸心、は一念と同義なり、
△斗室、斗の如き小室をいふ、
△兩閒、は天地兩閒のことにして天地宇宙を云ふ、
△鳥有、とは何もあ

ることなき義なり、

◎足るを知ることは處世に尤も必要なることなり、

△生機、人を益し物を利する機用（ハタラキ）なり、殺機は全く之に反す、

△炎、は權威勢力の

無可忘。焚香煮茗。總不問白衣童子。

讀方 之を損して又損す。花を栽る竹を種る、儘烏有先生に交還す。忘るべきなさを忘れ、香を焚き茗を煮て、總て白衣童子に問はず。

都來眼前事。知足者仙境。不知足者凡境。

總出世上因。善用者生機。不善用者殺機。

讀方 都て眼前に來る事は、足ることを知る者は仙境。足ることを知らざるものは凡境。總て世上に出づる因は、善く用ふる者は生機。善く用ひざる者は殺機。

趨炎附勢之禍。甚慘亦甚速。棲恬守逸之

熾勢なるをいふ、

△恬、は淡泊寡欲なり、

△破衲、破れたる衣類をいふ、

△窓蹠、粗にして溫からざる毛氈なり、

◎名利女色の愚なるを悟らば速に悟道の門に入り、道心を養ふべし、

味。最淡亦最長。

讀方 炎に趨り勢に附くの禍は、甚だ慘にして亦甚だ速なり。恬に棲み逸を守るの味は、最も淡にして亦最も長し。

松澗邊。携杖獨行。立處雲生破衲。竹窓下枕書高臥。覺時月侵寒氈。

讀方 松澗の邊、杖を携へて獨行す。立つ處雲破衲に生ず。竹窓の下書を枕にして高臥す。覺むる時、月寒氈を侵す。

色慾火熾。而一念及病時。便興似寒灰。名利飴甘。而一想到死地。便味如嚼蠟。故人

◎名利にのみ走らず、清淡の趣味を養ふべし、

常憂死慮病。病亦可消幻業而長道心。

讀方　色欲火の如く熾にして一念病時に及べば、便ち興寒灰に似たり。名利飴の如く甘くして一想死地に到らば、便ち味嚼蠟の如し。故に人常に死を憂ひ、病を慮らば亦幻業を消して道心を長すべし。

爭先的徑路窄。退後一步自寬平。一步。濃艶的滋味短。清淡一分自悠長。一分。

讀方　先を爭ふ的の徑路は窄し。一歩を退後すれば、自ら一歩を寛平にす。濃艶的の滋味は短し。一分を清淡にすれば、自ら一分を悠長にす。

◎平時に於て修養せざれば機に望んで周章狼狽するも益なし、

△炎涼、交友上に於ける親疎をいふ、

△窮愁、は貧窮を悲しみ憂ふる心なり、

忙處不亂性。須閒處心神養得清。死時不動心。須生時事物看得破。

讀方　忙處に性を亂さじらんとせば、須く閒處に心神養ひ得て清かるべし。死時に心を動かさじらんとせば、須く生時に事物看得て破るべし。

隱逸林中無榮辱。道義路上無炎涼。

讀方　隱逸林中には榮辱無し。道義路上には炎涼無し。

熱不必除而除此熱惱。身常在清涼臺上。窮不可遣而遣此窮愁。心常居安樂窩中。

讀方　熱は必ずしも除かず、而も熱惱を除けば、身常に

清涼臺上に在らん。窮は遣る可らず、而も此の窮愁を遣れば、心常に安樂窩中に居らん。

進歩處便思退歩。庶免觸藩之禍。着手時先圖放手。纔脫騎虎之危。

讀方 歩を進むる處、便ち歩を退くることを思はゞ、庶くは藩に觸るゝの禍を免れん。手を着くる時先づ手を放つことを圖らば、纔に虎に騎るの危きを脫れん。

貪得者分金恨不得玉。封公怨不受侯。權豪自甘乞丐。知足者藜羹旨於膏粱。布袍煖於狐貉。編民不讓王公。

△騎虎、は隋書獨孤皇后傳にあり、虎は猛獸にして人を見れば直に殺氣を生ず、若し人虎に乘れば下ること能はず、

◎此章知足の道を敎ふ、

△藜羹、は粗食、布袍は粗服なり、

△膏粱は美食、狐貉は美服なり、

△編民、は無位無官の平民をいふ、

讀方 得ることを貪る者は、金を分つて玉を得ざるを恨み、公に封せられて侯を受けざるを怨む。權豪自ら乞丐に甘んず。足ることを知る者は、藜羹も膏粱より旨く、布袍も狐貉より暖かに、編民も王侯に讓らず。

矜名不若逃名趣。練事何如省事閒。

讀方 名に矜るは名を逃るゝの趣あるに若かず。事を練るは何ぞ事を省くの間なるに如かん。

嗜寂者。觀白雲幽石而通玄。趨榮者。見清歌妙舞而忘倦。唯自得之士。無喧寂。無榮枯。無往非自適之天。

◎世を厭ふものも名利に趨るものも共に悠々自適の天地に逍遙すること能はず、

△朗鏡、は明月をいふ、
△靜躁、靜寂、喧躁を云ふ、
△醲釅、酒の濃厚にして甘きものをいふ、
△竹、笛及び簫をいふ、

讀方 寂を嗜む者は白雲幽石を觀て玄に通ず。榮に趨る者は清歌妙舞を見て倦を忘る。唯自得の士は喧寂なく、榮枯なく、往く所として自適の天に非るは無し。

孤雲出レ岫。去留一無レ所レ係。朗鏡懸レ空。靜躁兩不二相干一。

讀方 孤雲岫を出づる、去留一も係る所なし。朗鏡空に懸る、靜躁兩ながら相ひ干さず。

悠長之趣。不レ得二於醲釅一。而得二於啜レ菽飲レ水。
惆悵之懷。不レ生二於枯寂一。而生二於品レ竹調レ絲。
固知。濃處味常短。淡中趣獨眞也。

△糸、は琴瑟を云ふ、
◎極高は極平に寓し、至難は至易に出づ、

讀方 悠長の趣は醲釅に得ずして、菽を啜り水を飲むに得。惆悵の懷は枯寂に生ぜずして、竹を品し糸を調ぶるに生ず。固に知る、濃處の味は常に短く、淡中の趣は獨眞なることを。

禪宗曰。饑來喫レ飯。倦來眠。詩旨曰。眼前景致口頭語。蓋極高寓二於極平一。至難出二於至易一。有意者反遠。無心者自近也。

讀方 禪宗に曰く、饑來つて飯を喫し、倦來つて眠ると。詩旨に曰く眼前の景致口頭の語と、蓋し極高は極平に寓し、至難は至易に出づ。有意の者は反つて遠く、無心の

者は自ら近し。

水流而境無聲。得處喧見寂之趣。山高而雲不碍。悟出有入無之機。

讀方　水流れて境に聲なし。喧に處して寂を見るの趣を得。山高くして雲碍へず。有を出て無に入るの機を悟る。

山林是勝地。一營戀便成市朝。書畫是雅事。一貪癡便成商賈。蓋心無染着。欲界是仙都。心有係戀。樂境成苦海矣。

讀方　山林は是れ勝地なり。一たび營戀すれば便ち市朝と成る。書畫は是れ雅事なり。一たび貪癡すれば便ち商賈となる。蓋し心に染着無ければ、欲界も是れ仙都。心に係戀有れば樂境も苦海と成る。

△營戀も係戀も共に戀着の意なり、△染着、は執着なり、

時當喧雜。則平日所記憶者。皆漫然忘去。境在清寧。則夙昔所遺忘者。又恍爾現前。可見。靜躁稍分。昏明頓異也。

讀方　時喧雜に當れば則ち平日記憶する所の者、皆漫然として忘れ去る。境清寧にあれば則ち夙昔遺忘する所の者、又恍爾として現前す。見るべし、靜躁稍々分れば、昏明頓に異ることを。

◎求道の士は喧雜の所を避けて清寧の境を歩まざるべからず、

△蘆花被、は蘆花を綿として造りし夜具なり、
△竹葉杯、は其の形を竹葉に模したる杯なり、蘆花被も竹葉杯も貴顯の用ふるものにあらず、
△躱離、は離れることを言ふ、
△袞、は高官の服にして、冕は高官の冠なり、
△藜杖、はアカザの杖にて、仙人の用ふるものなり、

蘆花被下。臥雪眠雲。保全得一窩夜氣。竹葉杯中。吟風弄月。躲離了萬丈紅塵。

讀方　蘆花被下、雪に臥し雲に眠り、一窩の夜氣に保全し得。竹葉杯中風に吟じ、月を弄し、萬丈の紅塵を躲離し了る。

袞冕行中。着一藜杖的山人。便增一段高風。漁樵路上。着一袞衣的朝士。轉添許多俗氣。固知濃不勝淡。俗不如雅也。

讀方　袞冕行中に、一の藜杖的の山人を着くれば、便ち一段の高風を增す。漁樵路上に一の袞衣的の朝士を着くれば。轉た許多の俗氣を添ふ。固に知る、濃は淡に勝たず、俗は雅に如かざることを。

△了心、は自己の本心を悟了するをいふ、
△差遣、使役し命令すること、
△嚙味、嚙着すること、

出世之道。卽在涉世中。不必絕人以逃世。了心之功。卽在盡心內。不必絕欲以灰心。

讀方　出世の道は、卽ち世を涉る中に在り、必ずしも人を絕ち以て世を逃れず。了心の功は卽ち心を盡す內に在り。必ずしも欲を絕ち以つて心を灰にせず。

此身常放在閒處。榮辱得失。誰能差遣我。此心常安在靜中。是非利害。誰能嚙味我。

讀方　此の身常に閒處に放在せば、榮辱得失誰か能く我

△芸窓、芸は香草なり芸窓と連綴しては書窓と云ふ意なり、

を差遣せん。此の心常に静中に安在せば、是非利害誰か能く我を瞞昧せん。

竹籬下忽聞犬吠鷄鳴。恍似雲中世界。芸窓中。雅聽蟬吟鴉噪。方知靜裡乾坤。

讀方 竹籬の下、忽ち犬吠鷄鳴を聞けば、恍として雲中の世界に似たり。芸窓の中雅に蟬吟鴉噪を聽けば、方に靜裡の乾坤を知る。

我不希榮。何憂乎利祿之香餌。我不競進。何畏乎仕官之危機。

讀方 我れ榮を希はざれば、何ぞ利祿の香餌を憂へん。

△夷猶、は優游なり、

△玩物喪志、徒に圖書骨董を玩び一生を空しく消費するを云ふ、程明道が謝顯道を戒しめたる語なり、

△聊滯、悠然（ユッタリ）たるを云ふ、

我れ進を競はずんは、何ぞ仕官の危機を畏れん。

徜徉於山林泉石之間。而塵心漸息。夷猶於詩書圖畫之內。而俗氣潛消。故君子雖不玩物喪志。亦常借境調心。

讀方 山林泉石の間に徜徉して塵心漸く息む。詩書圖畫の內に夷猶して俗氣潛に消す。故に君子物を玩びて志を喪はずと雖も、亦常に境を借りて心を調ふ。

春日氣象繁華。令人心神駘蕩不若秋日雲白風消。蘭芳桂馥。水天一色。上下空明。使人神骨俱清也。

讀方　春日は氣象繁華なり。人をして心神駘蕩ならしむ。秋日の雲白く風消し、蘭芳しく桂馥しく、水天一色、上下空明、人をして神骨俱に清からしむるに若かず、

一字不識而有詩意者。得詩家眞趣。一偈不參。而有禪味者。悟禪教玄機。

讀方　一字識らずして詩意有る者は、詩家の眞趣を得。一偈參せずして、禪味あるものは禪教の言機を悟る。

機動的弓影疑爲蛇蝎。寢石視爲伏虎。此中渾是殺氣。念息的石虎可作海鷗。蛙聲可當鼓吹。觸處俱見眞機。

△坎止、停まるも、

◎世俗と運命に抵抗せず風のまに〳〵漂へば身に禍なし、

◎狠に是非善惡、嫌惡の念を起し差別の見をなすは天地の眞機を悟る所以の道に

讀方　機動く的は弓影も疑つて蛇蝎となし、寢石も視て伏虎と爲す。此中渾て是れ殺機なり。念息む的は石虎も海鷗と作すべく、蛙聲も鼓吹に當つべし。觸るゝ處俱に是れ眞機なり。

身如不繫之舟。一任流行坎止。心似既灰之木。何妨刀割香塗。

讀方　身は不繫の舟の如く、一に流行坎止に任す。心は既灰の木に似ば、何ぞ刀割香塗を妨げん。

人情聽鶯啼則喜。聞蛙鳴則厭。見花則思培之。遇草則欲去之。但是以形氣用事。若

あらず、

△幻形、始終變化するが故に幻形と言ふ、

△彫謝、彫は凋落すると謝は變化するこ

以性天視之。何者非自鳴其天機。非自暢其生意也。

讀方 人情鶯啼を聽けば則ち喜び、蛙鳴を聞けば則ち厭ふ。花を見れば則ち之を培せんことを思ひ。草に遇へば、則ち之を去らんことを欲す。但だ是れ形氣を以て事を用ふ。若し性天を以つて之を視れば、何者か自ら其の天機を鳴すに非らん。自ら其の生意を暢るに非らん。

髮落齒疎。任幻形之彫謝。鳥吟花咲。識自性之眞如。

讀方 髮落ち齒疎にして、幻形の彫謝に任せ。鳥吟し花

とをいふ、

△自性之眞理、常住不變の眞理をいふ、

△多藏者、金錢財寶を多く貯蓄する人、

咲ひ、自性の眞如を識る。

欲其中者。波沸寒潭。山林不見其寂。虛其中者。涼生酷暑。朝市不知其喧。

讀方 其の中を欲にする者は波寒潭に沸き、山林も其寂を見ず。其の中を虛にするものは涼酷暑に生じ、朝市も其の喧を知らず。

多藏者厚亡。故知富不如貧之無慮。高步者疾顚。故知貴不如賤之常安。

讀方 多く藏る者は厚く亡ぶ。故に富は貧の慮なきに如かざるを知る。高く步むものは疾く顚る。故に貴は

△寶磬、寺院にある樂器の一種なり、

◎物を苦しめて自ら樂しまんとするも眞に其の天趣は得難し、

賤の常に安きに如かざるを知る。

讀易曉窓。丹砂研松間之露。談經午案。寶磬宣竹下之風。

讀方 易を曉窓に讀んで、丹砂を松間の露に研き、經を午案に談じて、寶磬を竹下の風に宣ぶ。

花居盆內終乏生機。鳥入籠中便減天趣。不若山間花鳥錯集成文。翺翔自若自是悠然會心。

讀方 花盆內に居れば終に生機に乏し。鳥籠中に入れば、便ち天趣を減ず。若かず山間の花鳥錯り集つて文を成し、翺翔自若自ら是れ悠然たる會心には。

△身不是我、我が身體すら我にあらず、況んや外物をや、

世人只緣認得我字太眞。故多種種嗜好種種煩惱。前人云。不復知有我。安知物爲貴。又云知身不是我。煩惱更何侵。眞破的之言也。

讀方 世人只我の字を認め得ること、太だ眞なるに緣る、故に種々の嗜好、種々の煩惱多し。前人云ふ、復た我れ有ることを知らず、安んぞ物の貴きたることを知らんと。又云ふ身は是れ我ならざることを知らば、煩惱更に何んぞ侵さんと、眞に破的の言なり。

◎宜しく自己を客視して、奔馳角逐、紛華靡麗の念を絶つべし、

◎人情は變化極まりなきが故に固執せざるをよしとす、

△窘、繫累をいふ、

自老視少。可以消奔馳角逐之心。自瘁視榮。可以絶紛華靡麗之念。

讀方　老より少を視れば、以て奔馳角逐の心を消すべし。瘁より榮を視れば、以て紛華靡麗の念を絶つべし。

人情世態。倏忽萬端。不宜認得太眞。堯夫云。昔日所云我而今却是伊。不知今日我又屬後來誰。人常作是觀。便可解却胸中窘矣。

讀方　人情世態、倏忽萬端。宜しく認め得て太だ眞なるべからず。堯夫云ふ。昔日我と云ふ所、而今却つて是れ伊れ。知らず今日の我、又後來の誰にか屬せんと。人常に此の觀を作さば、便ち胸中の窘を解却すべし。

熱鬧中着一冷眼。便省許多苦心思。冷落處存一熱心。便得許多眞趣味。

讀方　熱鬧の中一冷眼を着れば、便ち許多の苦心思を省く。冷落の處一熱心を存せば、便ち許多の眞趣味を得。

有一樂境界。就有一不樂的相對待。有一好光景。就有一不好的相乘除。只是尋常家飯。素位風光。纔是個安樂的窩巢。

◎苦樂善惡美醜は凡て相對的の語なり、

△素位之風光、人間なく天間のまゝの風光と云ふ意なり、

△簾櫳、簾はスダレ、櫳は高格子の窓を云ふ、
△扶疎、枝葉の盛に繁茂するをいふ、
△時序、春夏秋冬の四季をいふ、

讀方　一の樂境界有れば、就ち一の不樂的の相對待する あり。一の好光景あれば、就ち一の不好的の相乘除する あり。只是れ尋常の家飯。素位の風光、纔に是れ個の安樂的の窩巣なり。

簾櫳高敞。看青山綠水吞吐雲煙。識乾坤之自在。竹樹扶疎。任乳燕鳴鳩送迎時序。知物我之兩忘。

讀方　簾櫳高く敞いて、青山綠水の雲烟を呑吐するを看て、乾坤の自在なるを識る。竹樹扶疎、乳燕鳴鳩の時序を送迎するに任せて、物我の兩忘るゝを知る。

△成、は成功、成業と纔く語にして、敗の反對なり、
◎動中に靜あり靜中に動あることを說く、
△古德、禪宗の大德を云ふ、
△吾儒、儒者をいふ、

知成之必敗。則求成之心。不必太堅。知生之必死。則保生之道。不必過勞。

讀方　成の必ず敗るゝを知れば、則ち成を求むるの心、必ずしも太だ堅らず。生の必ず死するを知れば、則ち生を保つの道、必ずしも過勞ならず。

古德云。竹影掃堦塵不動。月輪穿沼水無痕。吾儒云。水流任急境常靜。花落雖頻意自閒。人常持此意。以應事接物。身心何等自在。

讀方　古德云ふ竹影堦を掃ひて塵動かず、月輪沼を穿ち

て水に痕無しと。吾が儒云ふ。水流るゝこと急なるに任せて境常に静に、花落つること頻なりと雖も、意自ら間なりと。人常に此の意を持して、以て事に應じ物に接せば身心何等の自在ぞ。

△鳴佩、佩環（タマ）を鳴らすことにて音樂を言ふ、
△草際、は草上なり、

林間松韻。石上泉聲。靜裡聽來。識天地自然鳴佩。草際煙光。水心雲影。閒中觀去。見乾坤最上文章。

讀方　林間の松韻、石上の泉聲、靜裡に聽き來たれば、天地自然の鳴佩を識る。草際の烟光、水心の雲影、間中に觀去れば、乾坤最上の文章を見る。

△荆榛、索靖西晉の將に亂れんとするを見、洛陽宮門の銅駝を指して必ず荆棘中にあるを見るべしと言へり果して其言の如し此には亂世といふ意に用ふ、
△北邙、は洛陽城外の墓地なり、
△狐兎に屬すと云ふは身死して狐兎に發掘せらるゝと云ふ意より其身の必ず死に歸することを示す、
△隨在と隨處、は共に到る處と云ふ意なり、

眼看西晉之荆榛。猶矜白刃。身屬北邙之狐兎。尚惜黃金。語云。猛獸易伏。人心難降。谿壑易滿。人心難滿。信哉。

讀方　眼は西晉の荆榛を看、猶ほ白刃に矜る。身は北邙の狐兎に屬して、尚ほ黃金を惜む。語に云ふ、猛獸は伏し易く、人心は降し難し。谿壑は滿て易く、人心は滿て難しと。信なるかな。

心地上無風濤。隨在皆青山綠樹。性天中有化育。觸處見魚躍鳶飛。

讀方　心地上に風濤なければ、隨在皆青山綠樹、性天中

△�冠、高い冠を云ふ、
◎裍冠大帶、長筵廣席の人は却つて輕簑小笠の安逸、疎簾淨几の靜を羨む、
△火牛、は齊の田單が燕軍を破りし時の故事を用ふ、
△風馬、は風馬牛の略辭にして左傳にあり、風逸する馬牛といふ意にして即ち其の牝牡相誘ふ狀態なり、

に化育あれば、觸處魚躍り鳶飛ぶを見る。

裍冠大帶之士、一旦睹輕簑小笠飄々然逸也。未必不動其咨嗟。長筵廣席之豪。一旦遇疎簾淨几悠悠焉靜也。未必不增其綣戀。人奈何軀以火牛。誘以風馬而不思自適其性哉。

讀方 裍冠大帶の士、一旦輕簑小笠飄々然として逸するを見るや、未だ必ずしも其の咨嗟を動かさずんばあらず。長筵廣席の豪、一旦疎簾淨几悠々焉として靜かなるに遇へば、未だ必ずしも其の綣戀を增さずんばあらず。人奈

△敗砌、破壞したる處なり、
△灰、は冷灰なり、

何んぞ驅るに火牛を以つてし、誘ふに風馬を以てして、其の性に自適することを思はざるや。

魚得水逝。而相忘乎水。鳥乘風飛。而不知有風。識此可以超物累。可以樂天機。

讀方 魚は水を得て逝き、而して水に相忘る。鳥は風に乘じて飛び、而して風あるを知らず。此れを識らば以て物累を超ゆべく、以つて天機を樂しむべし。

狐眠敗砌。兎走荒臺。盡是當年歌舞之地。露冷黃花。煙迷衰草。悉屬舊時爭戰之場。盛衰何常。强弱安在。念此令人心灰。

◎名聲利達に奔走するもの多きを嘲ける、

讀方　狐敗砌に眠り、兎荒臺に走る。盡く是れ當年歌舞の地なり。露黄花に冷かに、烟衰草に迷ふ。悉く舊時爭戰の場に屬す。盛衰何ぞ常ならん、强弱安にかある。此を念へば人心をして灰ならしむ。

寵辱不レ驚。閒看庭前花開花落。去留無意。漫隨天外雲卷雲舒。晴空朗月。何天不レ可。翺翔。而飛蛾獨投夜燭。清泉綠卉何物不レ可飲啄。而鴟鴞偏嗜腐鼠。噫世之不レ爲飛蛾鴟鴞者。幾何人哉。

讀方　寵辱驚かず、閒に庭前の花開き花落つるを看る。去留意無し、漫に天外の雲卷き雲舒ぶるに隨ふ。晴雲明月、何れの天か翺翔すべからざらん。而るに飛蛾は獨り夜燭に投ず。清泉綠卉、何れの物か飲啄すべからざらん。而るに鴟鴞は偏に腐鼠を嗜む。噫世の飛蛾鴟鴞とならざるものは幾何く人ぞや。

△無事之道人、は大事を悟了せし人なり、

△不了、は了悟せざるをいふ、

纔就レ筏便思レ舍レ筏。方是無事道人。若騎レ驢又復覔レ驢。終爲不了禪師。

讀方　纔に筏に就いて便ち筏を舍つるを思ふ。方に是れ無事の道人なり。若し驢に騎つて又復驢を覔めば、終に不了の禪師と爲る。

△蜚興、針鼠の針の如く蜂起すとの意なり、

△夷猶、心神の悠々たるをいふ、

◎物欲に羈鎖せずして性眞に夷猶すれば生を樂しむの聖境に臻る、

權貴龍驤。英雄虎戰。以冷眼視之。如蟻聚羶。如蠅競血。是非蜂起得失蝟興。以冷情當之。如冶化金。如湯消雪。

讀方 權貴龍驤し、英雄虎戰す。冷眼を以て之を視れば蟻の羶に聚るが如く、蠅の血に競ふが如し。是非蜂起し、得失蝟興す。冷情を以て之れに當れば、冶の金を化するが如く、湯の雪を消すが如し。

羈鎖於物欲。覺吾生之可哀。夷猶於性眞。覺吾生之可樂。知其可哀。則塵情立破。知其可樂。則聖境自臻。

讀方 物欲に羈鎖すれば、吾が生の哀しむべきを覺ゆ。性眞に夷猶すれば、吾が生の樂しむべきを覺ゆ。其の哀しむべきを知れば則ち塵情立ろに破れ、其の樂しむべきを知れば則ち聖境自ら臻る。

胸中既無半點物欲。已如雪消爐焰。氷消日。眼前自有一段空明。時見月在青天。影在波。

讀方 胸中既に半點の物欲なければ、已に雪の爐焰に消え、氷の日に消ゆるが如し。眼前自ら一段の空明あれば、時に月青天に在り、影波に在るを見る。

△唐の鄭綮詩を善くす、相國たりし時、人あり新詩なきやと尋れしに吾が詩思は灞陵橋上に在り好詩を得る境にあらずと云ひしこと全唐詩話に出づ、

△唐の賀知章夢に仙宮に遊び感ずる所あり遂に官を辭し道士となり放生池を造りて自ら樂めり、詔ありて鏡湖剡川の一曲を賜はりしこと唐書隱逸傳に出づ、

△野興、は風流の清興なり、

詩思在灞陵橋上。微吟就林岫便已浩然。
野興在鏡湖曲邊。獨往時山川自相映發。

讀方　詩思は灞陵橋上に在り、微吟就るとき林岫便ち已に浩然たり。野興は鏡湖曲邊にあり、獨往のとき、山川自ら相映發す。

伏久者飛必高。開先者謝獨早。知此可以免蹭蹬之憂。可以消躁急之念。

讀方　伏すること久しきものは、飛ぶこと必ず高し。開くこと先つものは、謝すること獨り早し。此れを知らば以つて蹭蹬の憂を免かるべく、以つて躁急の念を消すべし。

△蹭蹬、躓み外すこと、身を誤るの憂を云ふ、

樹木至歸根而後。知華蕚枝葉之徒榮。人事至蓋棺而後。知子女玉帛之無益。

讀方　樹木根に歸するに至つて後に、華蕚枝葉の徒榮なるとを知る。人事棺を蓋ふに至つて後に、子女玉帛の無益なるを知る。

眞空不空。執相非眞。破相亦非眞。問世尊如何發付。在世出世。狥欲是苦。絕欲亦是苦。聽吾儕善自修持。

讀方　眞空は空ならず、執相は眞にあらず、破相も亦眞にし。

◎欲に狥ふも苦、欲を絕つも亦苦なり、

△千乘は戰時千乘の兵車を出す大國をいふ、
△星淵、天の星と地の淵、相異の甚しきを云ふ、

あらず。問ふ世尊如何か發付する。在世出世欲に狥ふは是れ苦。欲絶つも亦苦なり。吾が儕の善く自ら修持すべきを聽け。

烈士讓千乘。貪夫爭一文。人品星淵也。而好名不殊好利。天子營家國。乞人號饔飧。位分霄壤也。而焦思何異焦聲。

讀方 烈士は千乘を讓り、貪夫は一文を爭ふ。人品は星淵なり。而も名を好むは利を好むに殊ならず。天子は家國を營み、乞人は饔飧を號ぶ。位分は霄壤なり。而も思を焦すは、何ぞ聲を焦すに異ならん。

△覆雨翻雲、手を覆へは是れ雨、手を翻せば雲と言ふ古句あり、變化極まりなきを云ふ、
△隨教、打ち任すこと、

飽諳世味。一任覆雨翻雲。總慵開眼。會盡人情。隨教呼牛喚馬。只是點頭。

讀方 飽くまで世味を諳ずれば、覆雨翻雲に一任して、總て眼を開くに慵し。人情を會し盡せば、牛と呼び馬と喚ぶに隨教して只是れ點頭す。

今人專求無念。而終不可無。只是前念不滯。後念不迎。但將現在的隨緣。打發得去。

讀方 今人專ら念なきを求めて終になかるべからず。只是れ前念滯らず、後念迎へず。但現在的の隨緣を將つ

△調停、故意に調停すると、
△白氏、は白樂天をいふ、

て打發し得去れば、自然漸々に無に入る。

意所偶會便成佳境。物出天然。纔見眞機。若加一分調停布置。趣味便減矣。白氏云。意隨無事適。風逐自然清。有味哉。其言之也。

◎性天澄徹せざれば

讀方　意の偶會する所、便ち佳境をなす。物は天然に出て、纔に眞機を見る。若し一分の調停布置を加へば、趣味便ち減ず。白氏云ふ、意は無事に隨つて適し、風は自然を逐うて清しと、味あるかな其の之を言ふや。

性天澄徹。卽饑喰渴飲。無非康濟身心。心

心身を康濟すること能はず、

○糸は琴、竹は笛、
△恬愉、喜ばしく且つ愉快なるをいふ、
△清芬、は清香なり、
△游衍、は遊樂の意なり、

地沉迷。縱談禪演偈。總是播弄精魂。

讀方　性天澄徹すれば、即ち饑ゑて喰ひ渴して飲むも、身心を康濟するに非るはなし、心地沈迷せば縱ひ禪を談じ偈を演ぶるも、總て是れ精魂を播弄す。

人心有個眞境。非絲非竹而自恬愉。不煙不茗而自清芬。須念淨境空慮忘形釋。纔得以游衍其中。

讀方　人心個の眞境あり。絲にあらず、竹にあらずして自ら恬愉す。煙ならず茗ならずして自ら清芬なり。須らく念淨く境空しく、慮忘れ、形釋くべし。纔に以

◎俗にあつて俗に墮せざる所に眞の風趣あり、

◎道眼を以て萬物を觀れば差別、取捨の煩なし、

つて其の中に游衍することを得ん。

金自レ鑛出。玉從レ石生。非レ幻無以求眞。道得二酒中。仙遇二花裡。雖レ雅不レ能離レ俗。

讀方　金は鑛より出て玉は石より生ず。幻に非れば以て眞を求むることなし。道は酒中に得、仙は花裡に遇ふ。雅なりと雖も俗を離るゝこと能はず。

天地中萬物。人倫中萬情。世界中萬事。以二俗眼一觀。紛紛各異。以道眼一觀。種種是常。何煩分別。何用取捨。

讀方　天地中の萬物、人倫の萬情。世界中の萬事、俗眼を以て見れば、紛々各異なり。道眼を以て觀れば種々是れ常なり、何ぞ分別を煩さん。何ぞ取捨を用ひん。

△布被、布の夜具なり、
△冲和、は溫和なり、
△繩脫、束縛と解脫なり、
△屠肆、牛馬を屠殺し之を賣る店なり、
△糟糟、は糟粕（サケ）の賣店を云ふ、

神酬布被窩中。得二天地冲和之氣。味足藜羹飯後。識二人生澹泊之眞。

讀方　神酬なれば布被窩中に、天地冲和の氣を得。味足れば藜羹飯後に、人生澹泊の眞を識る。

纏脫只在自心。心了則屠肆糟糟居然淨土。不レ然縱一琴一鶴。一花一卉。嗜好雖清。魔障終在。語云。能休塵境爲眞境。未了僧家是俗家。信夫。

△斗室、は小室をいふ、

讀方　纏脱は只自心にあり、心了すれば則ち屠肆糟塵も居然たる淨土、然ざれば縱ひ一琴一鶴一花一卉、嗜好清しと雖も魔障終に在り。語に云ふ、能く休すれば塵境も眞境と爲り、未だ了せざれば僧家も是れ俗家なりと、信なるかな。

斗室中萬慮都捐。說甚畫棟飛雲。珠簾捲雨。三杯後一眞自得。唯知素琴橫月。短笛吟風。

讀方　斗室中萬慮都て捐れば、甚の畫棟雲を飛ばし、珠簾雨を捲くを說かん。三杯後一眞自得すれば、唯素琴月に橫へ、短笛風に吟するを知る。

萬籟寂寥中。忽聞一鳥弄聲。便喚起許多幽趣。萬卉摧剝後。忽見一枝擢秀。便觸動無限生機。可見性天未常枯槁。機神最宜觸發。

讀方　萬籟寂寥の中、忽ち一鳥の弄聲を聞けば、便ち許多の幽趣を喚起す。萬卉摧剝の後、忽ち一枝の擢秀を見れば、便ち無限の生機を觸動す。見るべし、性天未だ常に枯槁せず、機神最も宜しく觸發すべし、

白氏云。不如放身心。冥然任天造。晁氏云

不如收身心。凝然歸寂定。放者流爲猖狂。
收者入於枯寂。唯善操身心的。欄柄在手。
收放自如。

讀方 白氏云く、如ず身心を放ち、冥然として天造に任すには。晁氏云く、如かず身心を收め凝然として寂定に歸するにはと。放者は流れて猖狂となり、收者は枯寂に入る。唯善く身心を操る的は欄柄手にあり、收放自如たり。

當雪夜月天。心境便爾澄徹。遇春風和氣。
意界亦自冲融。造化人心混合無間。

讀方 雪夜月天に當ては心境便ち爾く澄徹す。春風和氣に遇へば意界も亦自ら冲融す。造化人身混合間なし。

▲淳龐よく境に順應することなり。
△襄颯は寂寥をいふ。

文以拙進。道以拙成。一拙字有無限意味。
如桃源犬吠桑間鷄鳴。何等淳龐。至於寒
潭之月古木之鴉。工巧中便覺有襄颯氣
象矣。

讀方 文は拙を以つて進み、道は拙を以て成る。一の拙の字無限の意味あり。桃源の犬吠桑間の鷄鳴の如きは何等の淳龐ぞ。寒潭の月、枯木の鴉に至つては、工巧中に便ち襄颯の氣象あるを覺ゆ。

◎己自ら天地萬物の

以我轉物者。得固不喜。失亦不憂。大地盡

主宰となつて物を轉ずると、物に役せられて轉ずるとは天地霄壤の差あり、物を役して、物に役せらるゝ勿れ、

◎理に執着するは影を去つて形を留むるが如し、

△麤も蚋も不潔なるものをいふ、

屬逍遙。以物役我者。逆固生憎。順亦生愛。一毛便生纏縛。

讀方　我を以つて物を轉ずる者は、得も固より喜ばず、失も亦憂ず。大地靄く逍遙に屬す。物を以て我を役するものは、逆は固より憎を生じ、順も亦愛を生ず。一毛便ち纏縛を生ず。

理寂則事寂。遣事執理者似去影留形。心空則境空。去境存心者如聚羶却蚋。

讀方　理寂なれば則ち事寂なり。事を遣つて理を執する者は、影を去つて形を留むるに似たり。心空なれば則ち境空なり。境を去つて心を存する者は羶を聚めて蚋を却くるが如し。

△眞率、率直にして飾氣なきをいふ、

△坦夷、淡泊にして平安なり、

幽人清事總在自適。故酒以不勸爲歡。棋以不爭爲勝。笛以無腔爲適。琴以無絃爲高。會以不期約爲眞率。客以不迎送爲坦夷。若一牽文泥迹。便落塵世苦海矣。

讀方　幽人の清事は總て自適にあり。故に酒は勸めざるを以て歡と爲し、棋は爭はざるを以つて勝を爲し、笛は無腔を以て適と爲し。琴は無絃を以て高しと爲し、會は期約せざるを以て眞率と爲し、客は迎送せざるを以て坦